

福岡市西区大字田

# 高柳遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第70集



1981

福岡市教育委員会

福岡市西区大字田

# 高柳遺跡

田隈中学校建設地内遺跡の発掘調査報告書

昭和56年3月

福岡市教育委員会

9

J

4

5

## 序 文

開発事業の急激な進展は、埋蔵文化財の現状保存を不可能にします。

この問題の解決のため、現在では開発により消滅する遺跡については、事前の調査を実施し、記録として保存し、後世の人々に郷土の歴史を正しく伝えていく方法が採られているところであります。

今回の調査も都市化による人口の増加に伴う、児童生徒の急増に対処するため、昭和54年4月に開校された市立田隈中学校の建設敷地内に所在する遺跡について、教育委員会が調査主体となり実施したものであります。

発掘調査の結果は、本書に記載しておりますように、多くの成果を収めることができました。

本書が市民各位の文化財保護及び学術研究の分野において、貢献することを念願いたしますとともに、調査に際してよせられました多くの方々のご協力に対し、心から謝意を表する次第であります。

昭和56年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西 津 茂 美

## 本 文 目 次

<b>I はじめに .....</b>	<b>5</b>
1 発掘調査に至るまで.....	5
2 発掘調査の組織と構成.....	5
3 遺跡の位置と環境.....	6
<b>II 発掘調査の概要 .....</b>	<b>9</b>
1 発掘調査の経過.....	9
<b>III 遺構と遺物 .....</b>	<b>11</b>
1 竪穴遺構.....	11
第 1 号竪穴.....	11
第 2 号竪穴.....	13
第 3 号竪穴.....	13
第 4 号竪穴.....	15
第 5 号竪穴.....	16
第 6 号竪穴.....	17
第 7 号竪穴.....	19
第 8 号竪穴.....	19
2 溝状遺構.....	19
第 1 号溝.....	19
第 2 号溝.....	20
3 表採、耕作土の遺物.....	23
<b>IV おわりに .....</b>	<b>26</b>

## 凡 例

1. 本書は福岡市教育委員会が福岡市西区大字田に計画した梅林地区中学校(田隈中学校)の建設に先立ち、1978年10月11日から12月2日までに発掘調査した高柳遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書の編集と執筆は、二宮忠司、渡辺和子の助言と協力をえて横山と力武があたった。
3. 本書に使用した遺構の実測と撮影は二宮、渡辺、横山、力武が分担し、遺物の実測、撮影は力武が担当した。
4. 本書に使用した遺物実測図の縮尺は土器を $\frac{1}{10}$ と $\frac{1}{20}$ に、石器は $\frac{1}{20}$ に統一した。遺物写真は石器を実大、土器を $\frac{1}{20}$ に縮尺した。なお遺物番号は挿図と写真図版とは一致している。
5. 表紙の文字は実測栄治氏による。

## 挿 図 目 次

Fig. 1 高柳遺跡周辺の遺跡分布図	(縮尺 $1/25,000$ ) .....	7
Fig. 2 高柳遺跡周辺地形図	(縮尺 $1/5,000$ ) .....	8
Fig. 3 高柳遺跡発掘区平面図	(縮尺 $1/1,000$ ) .....	10
Fig. 4 高柳遺跡遺構配置図	(縮尺 $1/200$ ) .....	折りこみ 10~11
Fig. 5 第1号竪穴遺構実測図	(縮尺 $1/30$ ) .....	11
Fig. 6 第1号竪穴出土遺物実測図	(縮尺 $1/3$ ) .....	11
Fig. 7 第1号竪穴出土遺物実測図	(縮尺 $1/3$ ) .....	12
Fig. 8 第2号竪穴出土遺物実測図	(縮尺 $1/2$ ) .....	14
Fig. 9 第3号竪穴出土遺物実測図	(縮尺 $1/2 \cdot 1/3$ ) .....	14
Fig. 10 第4号竪穴遺構実測図	(縮尺 $1/30$ ) .....	15
Fig. 11 第4号竪穴出土遺物実測図	(縮尺 $1/3$ ) .....	15
Fig. 12 第5号竪穴遺構実測図	(縮尺 $1/30$ ) .....	16
Fig. 13 第5号竪穴出土遺物実測図	(縮尺 $1/3$ ) .....	16
Fig. 14 第6号竪穴遺構実測図	(縮尺 $1/30$ ) .....	17
Fig. 15 第6号竪穴出土遺物実測図	(縮尺 $1/3$ ) .....	17
Fig. 16 第6号竪穴出土遺物実測図	(縮尺 $1/3$ ) .....	18
Fig. 17 第7号竪穴遺構実測図	(縮尺 $1/30$ ) .....	19
Fig. 18 第8号竪穴出土遺物実測図	(縮尺 $2/3$ ) .....	19
Fig. 19 第1号溝出土遺物実測図	(縮尺 $1/2 \cdot 2/3 \cdot 1/3$ ) .....	20
Fig. 20 第2号溝出土遺物実測図	(縮尺 $1/2$ ) .....	21
Fig. 21 第2号溝出土遺物実測図	(縮尺 $1/2 \cdot 2/3 \cdot 1/3$ ) .....	22
Fig. 22 表採、耕作土出土遺物実測図	(縮尺 $2/3$ ) .....	24
Fig. 23 表採、耕作土出土遺物実測図	(縮尺 $1/2 \cdot 2/3$ ) .....	25

## 図 版 目 次

	本文対照頁	
PL. 1	高柳遺跡周辺航空写真.....	6
PL. 2	高柳遺跡周辺航空写真.....	6
PL. 3	① 発掘区全景(東から)      ② 発掘区全景(西から).....	9
PL. 4	① 第1号竪穴      ② 第1号竪穴遺物出土状況.....	11
PL. 5	① 第4号竪穴      ② 第5号竪穴.....	15
PL. 6	① 第5号竪穴      ② 第5号竪穴遺物出土状況.....	16
PL. 7	① 第6号竪穴      ② 第6号竪穴遺物出土状況.....	17
PL. 8	① 溝状遺構(北から)      ② 溝状遺構(南から).....	19
PL. 9	第1号竪穴出土遺物.....	11
PL. 10	第1号竪穴出土遺物.....	12
PL. 11	第2、3号竪穴出土遺物.....	14
PL. 12	第4、5号竪穴出土遺物.....	15~16
PL. 13	第6号竪穴出土遺物.....	17~18
PL. 14	第1、2号溝出土遺物.....	20~21
PL. 15	第2号溝出土遺物.....	21
PL. 16	第2号溝出土遺物.....	22
PL. 17	第2号溝出土遺物、表採、耕作土出土遺物.....	22
PL. 18	表採、耕作土出土遺物.....	24
PL. 19	表採、耕作土出土遺物.....	25
 早良平野航空写真（背振山上空より） .....		9
田村団地内遺跡全景.....		26
高柳遺跡発掘作業風景.....		図版扉

# I はじめに

## 1 発掘調査に至るまで

福岡市における人口増加はとどまることをしらず、特に西区では住宅建設が進みここ数年で田園風景を見ることができないような勢いで開発が進行しつつある。人口増加に伴い学校建設も急務となっており、梅林校区でも大字田に中学校の建設が立案され、1977年に具体化した。このため文化課は、周辺遺跡の関連から遺跡の存在する可能性が強いと判断し12月19日から22日までの3日間にわたってトレンチ掘りによる試掘調査を実施した。この結果を踏まえて翌年6月16日に教育委員会管理課と本調査の実施についての協議を行なった。この後数回の協議を重ね本調査を10月から30日間の予定で開始することになったが、すでに開校予定日が決定しており建設工事を開始させる必要があり、さらに建設工事に先立って地下鉄工事残土で埋立てるとの要請があった。幸いにも試掘調査で検出された遺構は学校敷地の全面ではなく、運動場に予定されている北側寄りに集中していることがわかつており、本調査範囲とは直接関係ないために先の要請に合意した。

## 2 発掘調査の組織と構成

昭和52年12月の試掘から本調査をへて資料整理までには、多くの人達の御協力を受けた。記して感謝いたします。

**調査主体** 福岡市教育委員会

**調査担当** 福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財係

**事務担当** 国武勝利 古藤国生 岡島洋一

**発掘担当** 飛高憲雄 二宮忠司 渡辺和子 横山邦継 力武卓治

**資料整理** 花畠照子 溝口博子 藤たかえ 岩永真弓 中村満代 武本延子 安武裕子  
河野徹也 藤田 太 実渕栄治

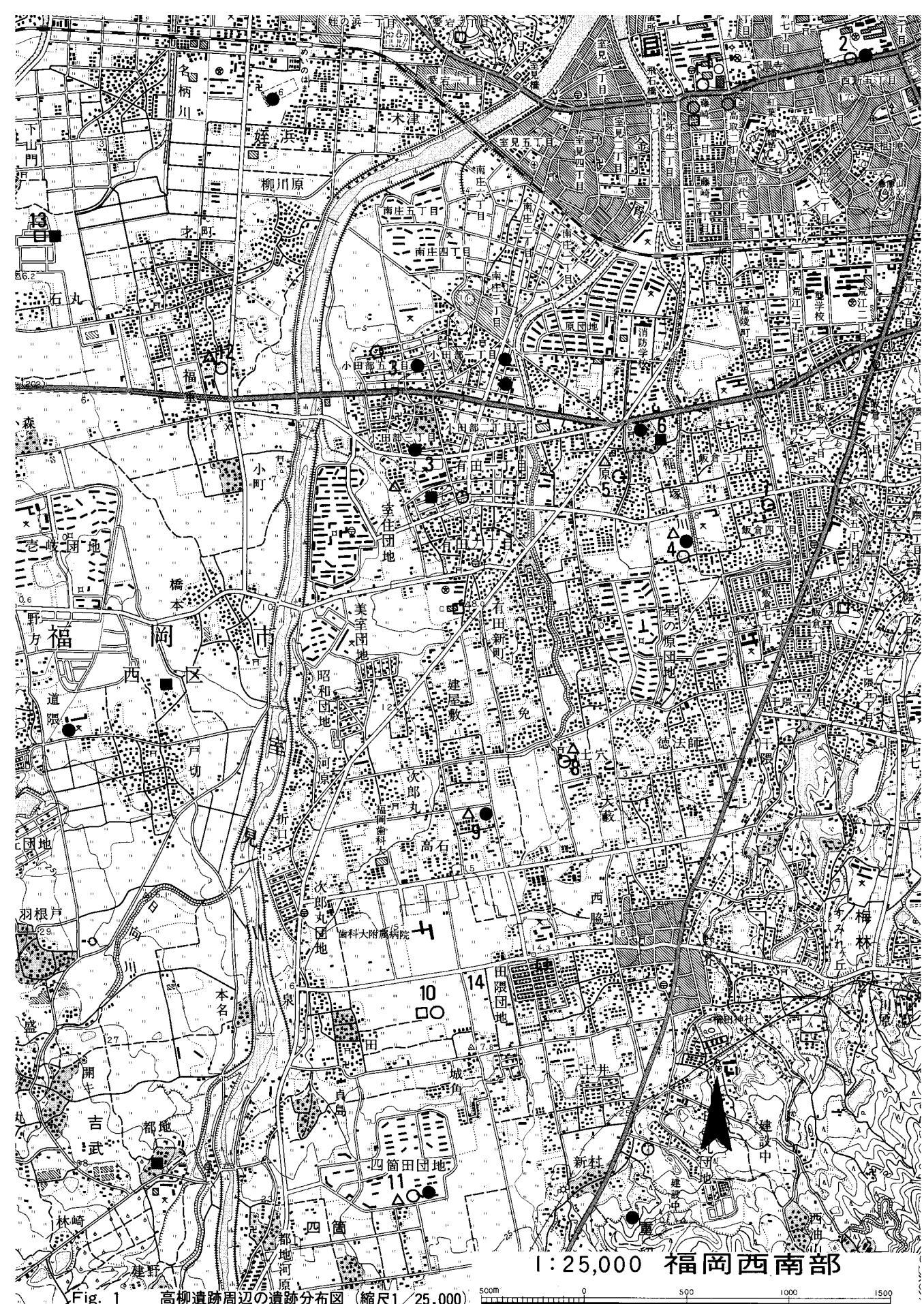
**調査協力者** 樋 光雄 萩田重美 尾崎八重 菊地栄子 菊地キミ 菊地ミツヨ 萩田オリエ  
野田部コト 又野栄子 松隈ゆきの 真名子ゆきえ 谷 ヒサヨ

### 3 遺跡の位置と環境 (Fig. 1 PL. 1、2)

高柳遺跡は福岡市西区大字田にあり、早良平野のほぼ中央部に位置している。早良平野は、北側に向かって拡がる三角形をした沖積平野で、この中央部を室見川が貫流している。早良平野での考古学的な発掘調査は、戦前に行なわれた藤崎遺跡を初めとして現在までに50遺跡以上を数えている。特に福岡市教育委員会に文化課が設置され行政発掘する体制がとられて以来発掘調査した遺跡数は90%以上を占めている。早良平野における開発は住宅建設が主なものである。当初は平野周辺の丘陵部が開発されていたが1970年代中ごろから平野部にも及んできた。これとともに平野部での発掘例が増え、低湿地に位置する遺跡の様相が次第に明らかになりつつある。西区拾六町にある湯納遺跡は、早良平野における最初の低湿地での調査例であるが、古墳時代前期の堰をはじめとする用水施設が検出され、木製農耕具などから水稻農耕の実像が具体的になってきた。湯納遺跡の立地は宮の前遺跡のある低丘陵が平野部にのびている部分にあたり、いわば平野周辺部における水田経営の姿としてとらえられたものの平野部沖積地における遺跡の存在、丘陵部から沖積地へという水田進出の経過等については資料不足であった。その後、牟多田遺跡、鶴町遺跡、四箇遺跡、原談儀遺跡、下山門遺跡、福重遺跡、原深町遺跡など平野内部における調査があいついだ。これらの遺跡の立地は砂丘後背地や河川の氾濫原、あるいは現在の水田下にあり、従来遺跡は存在していないと推定されていた。しかし、原談儀遺跡や鶴町遺跡、四箇遺跡の発掘で現在の水田下に微高地の存在がわかり、早良平野における水稻農耕がこれらの微高地を核として定着していった経過が推定されるようになってきた。さらにこれらの遺跡からは一様に夜臼式土器が出土し、沖積地への進出がかなり早い時に行なわれたことを示している。高柳遺跡もこれらの遺跡と同じように平野部中央に位置し、四箇遺跡も近接していることなどから水稻農耕に関連する遺構の検出が予想された。

高柳遺跡周辺遺跡一覧表 (△縄文時代○弥生時代●古墳時代■中世□青銅器出土地)

1 藤崎遺跡群	(1911年、1916年、1930年 1977年～1978年、1980年調査)	8 鶴町遺跡	(1973年調査)	)
2 西新町遺跡	(1976～1978年調査)	9 次郎丸高石遺跡	(1980年調査)	)
3 有田遺跡群	(1966～1967年、1975年以降継続調査中)	10 田村遺跡群	(調査中)	)
4 原深町遺跡	(1979年調査)	11 四箇遺跡群	(1976年～継続調査中)	)
5 原談儀遺跡	(1975年調査)	12 福重遺跡	(1976年調査)	)
6 原小園遺跡	(1978年調査)	13 下山門敷町遺跡	(1975年調査)	)
7 飯倉向江遺跡	(1978年調査)	14 高柳遺跡	(1978年調査)	)



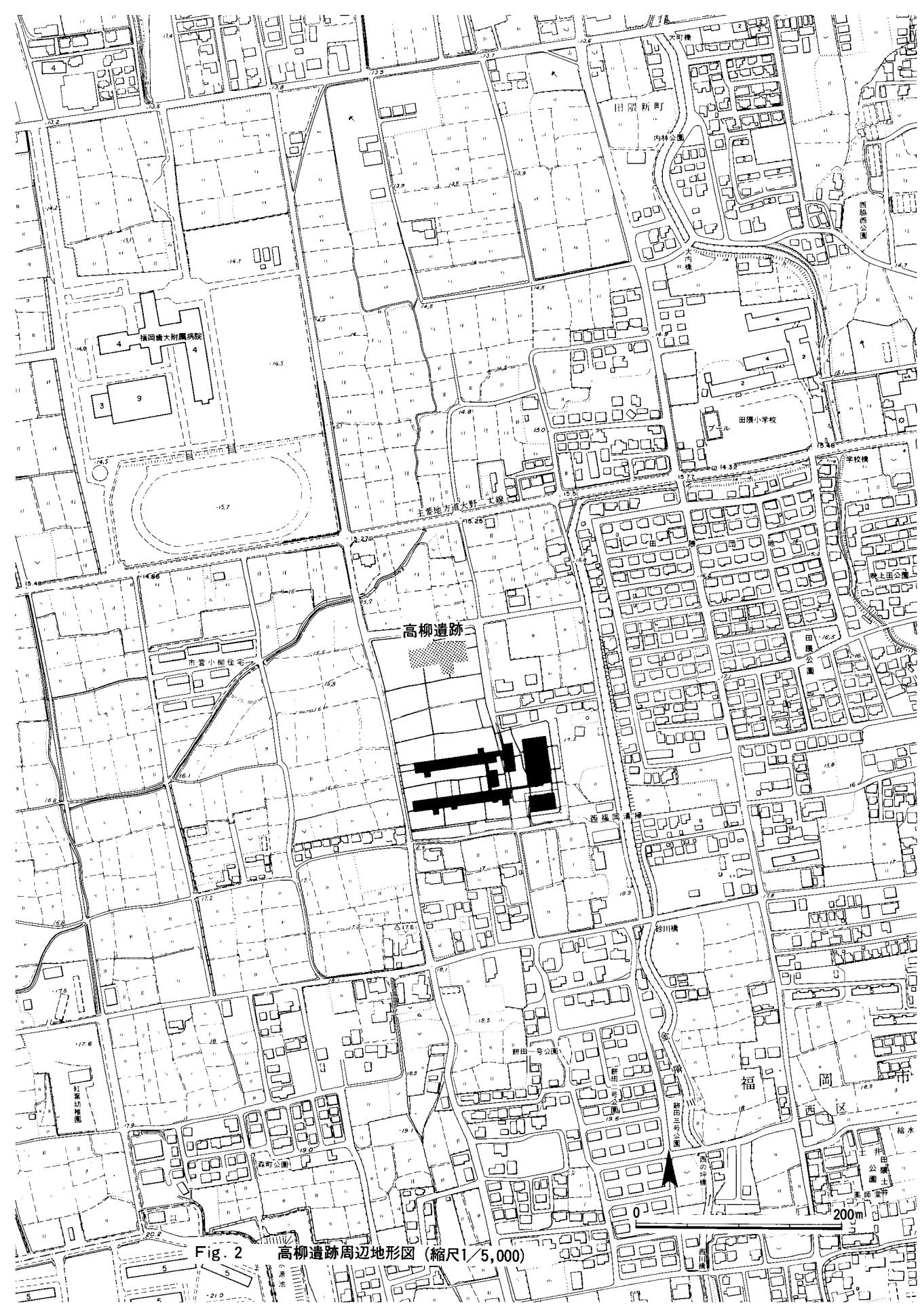


Fig. 2 高柳遺跡周辺地形図（縮尺1/5,000）

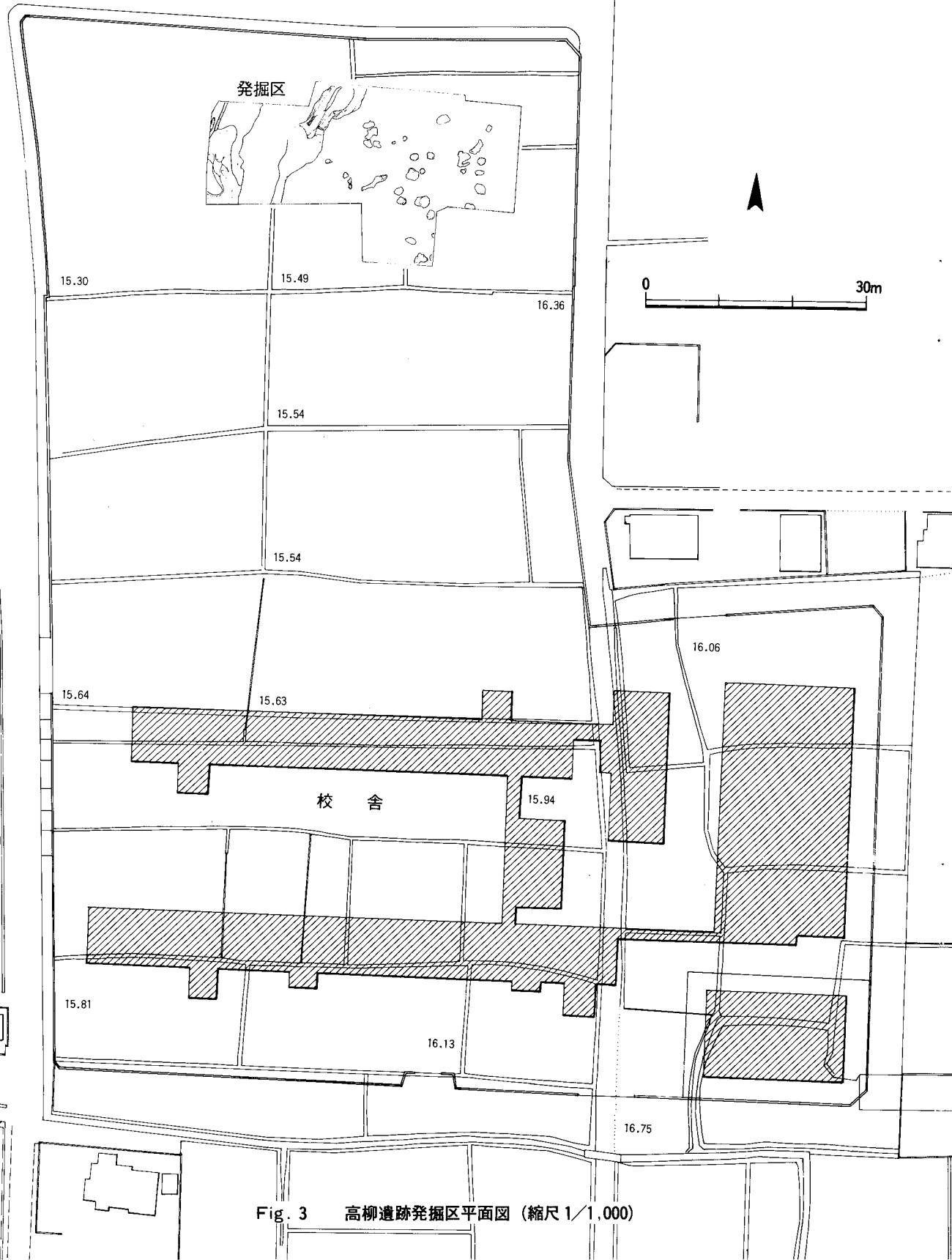
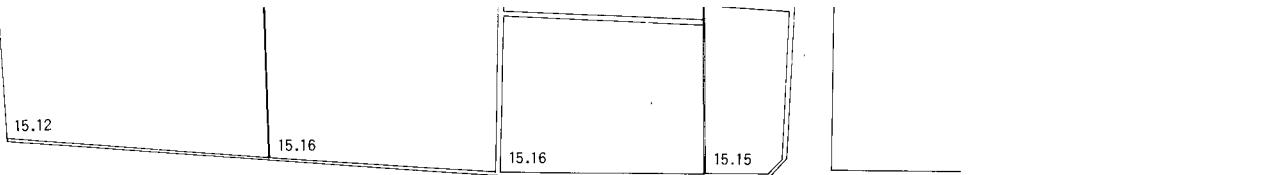
## II 発掘調査の概要

### 1 発掘調査の経過

試掘調査の結果を踏まえて管理課と協議した調査対象範囲は、運動場となる部分の南北50m東西60mの3,000m<sup>2</sup>である。試掘調査で遺構が検出されなかった部分は、すでに地下鉄残土によって埋立てられ校舎の建設がかなり進展している段階で本調査に着手することになった。試掘調査で検出した遺構は、砂礫層に落ちこんだ砂質黒色土の竪穴であったが、トレーナー掘りであったために遺構の数、密集度、さらには遺跡の広がりなど正確には把握されていなかったがために調査対象地の水田耕作土を全面にわたって重機で剥ぐことから作業を開始した。ただ最近まで水田に利用されており、低湿地のためか排水の便が悪く、北東隅から約300mずつ小刻に発掘していく方法をとり、時計まわりにI、II、III、IV区と呼ぶことにした。I～IV区ともに耕作土、床土下に鉄分が草根状に縦に入った灰茶色土層があり、この下が灰色砂を混じえる砂礫層となっている。礫層面は平坦ではなく部分的に耕作土下に露出している所もあり、概して西側に向かって高くなっている。地山と考えた砂礫層の上部の灰茶色土層は東側ほど厚く堆積しており、この層からは少量ながら縄文式土器、土師器、須恵器、青磁や石器などが出土した。遺構はI～IV区の全面にわたって竪穴を検出したが平面形が不整形のものが多く、遺物が出土しないものが大部分であり、これらの竪穴には番号をつけなかった。III、IV区の西側端は砂礫層が上がり遺構の存在は可能性がないものと思われたのであるが、IV区の北西隅でわずかに砂層の落ちこみが現われたために、西側に28m拡張した。この拡張区で2条の南西から北東方向の浅い溝を検出し、東の溝から第1、第2号溝とした。



早良平野航空写真（背振山上空より）



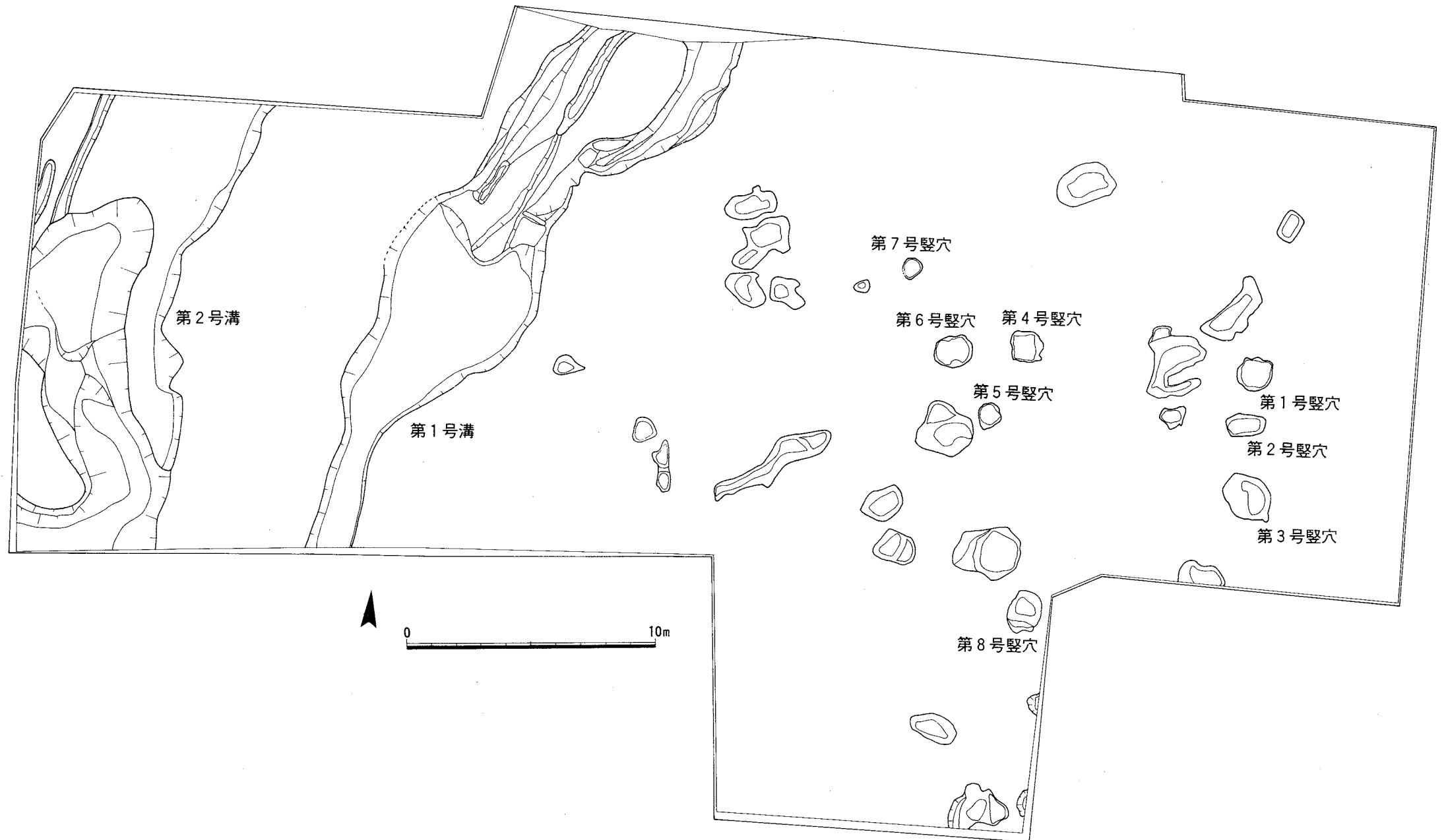


Fig. 4 高柳遺跡遺構配置図 (縮尺 1/200)

### III 遺構と遺物

#### 1 竪穴遺構

総数31の竪穴を検出したが、ほとんどが自然の落ちこみと考えられるもので、ここで取りあげるのは第1号から第8号までの8基のみである。

第1号竪穴 (Fig. 5 PL. 4)

第1号竪穴は、II区で検出したもので平面形は直径150cmの不整円形をしている。埴底プランは上面と同じように不整円形で埴底は平坦でない。竪穴の深さは50cmで、その中間ほどの深さに中央に方形の穴を穿った木材があり、他に5、6本の杭状の芯持ち丸太材が重なって出土した。これらの木材は埴底に近いものほど保存状態が良好であるが、方形孔を穿った木材は腐蝕が進み取り上げることができなかつた。この木材は厚さ約2.5cmでほぼ均一の厚さに加工してある。中央の方形孔は7.5×7.0cmを測る。上向きにかなり湾曲している。これらの木材の下より高壙

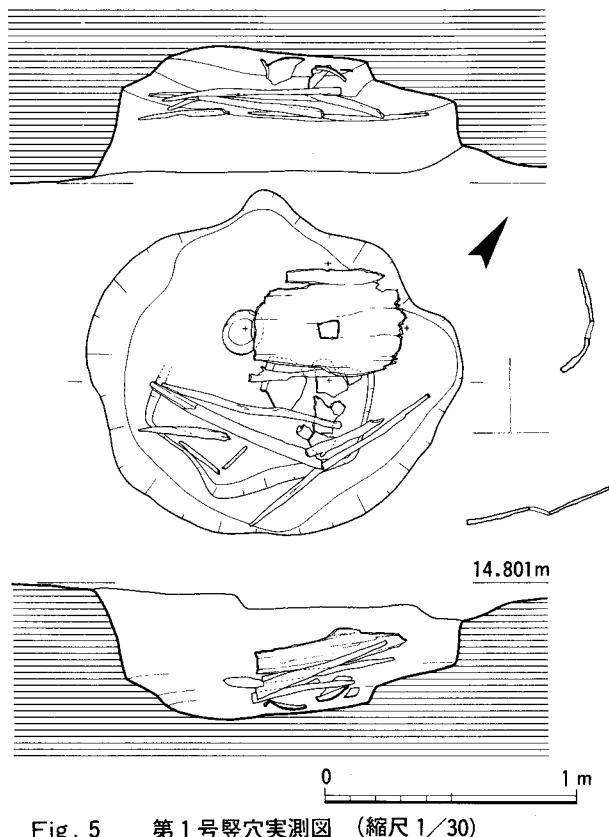


Fig. 5 第1号竪穴実測図 (縮尺 1/30)

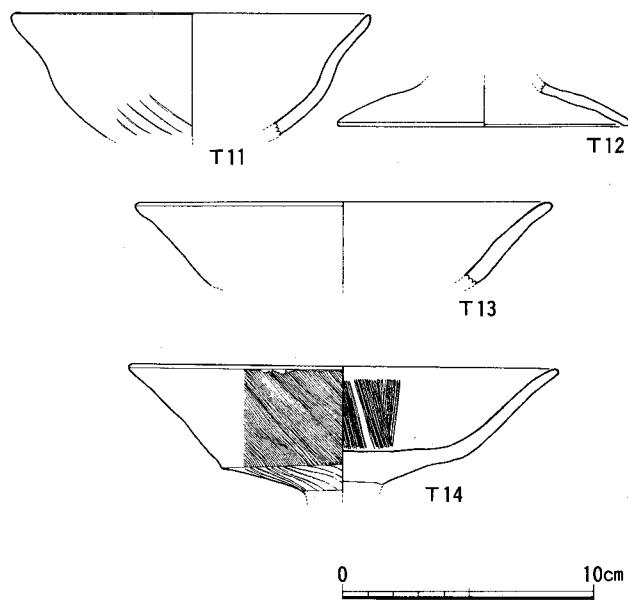


Fig. 6 第1号竪穴出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

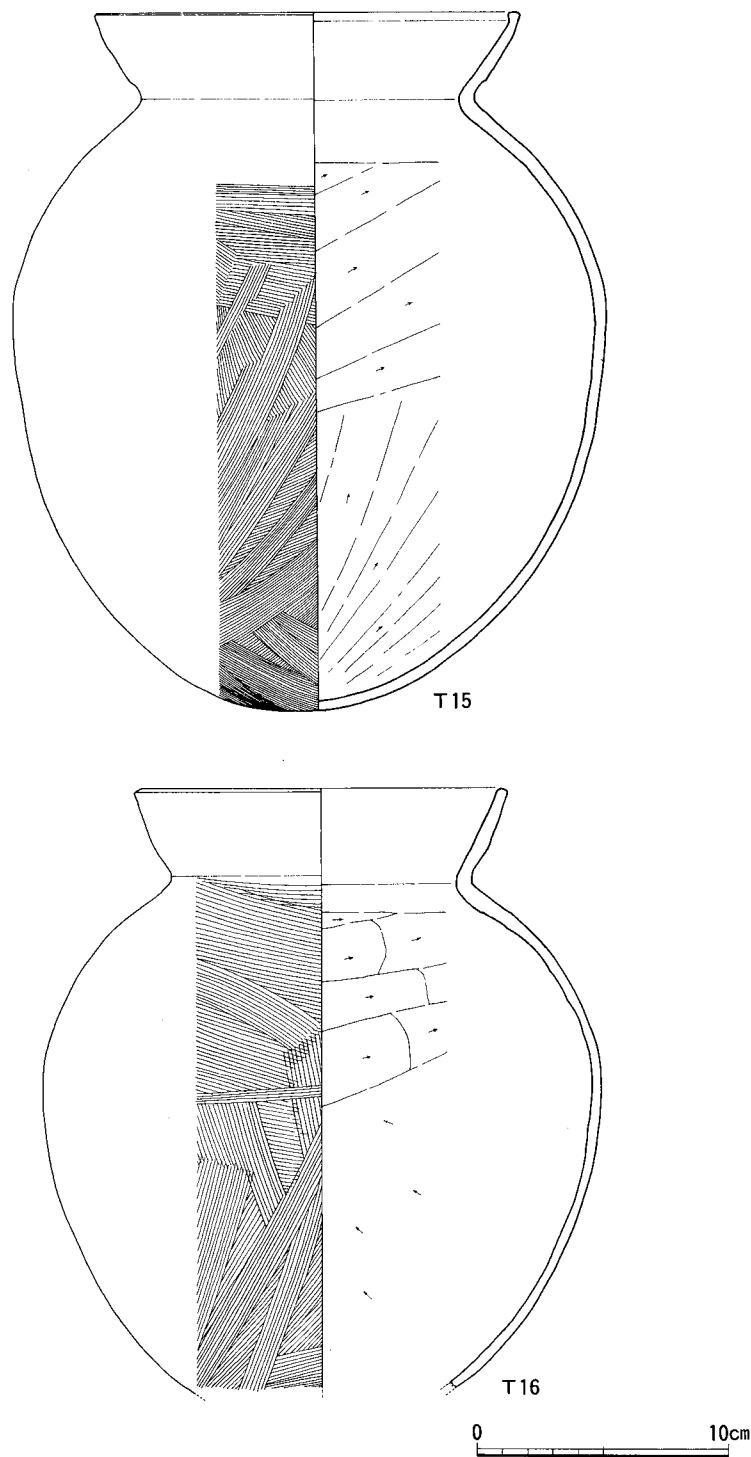


Fig. 7 第1号竪穴出土遺物実測図（縮尺1/3）

と甕2個体が出土した。高坏（T14）は脚部と坏部とのつけ根を折ったようであり、竪穴の中には脚部は見られなかった。2個体の甕のうち一つは口縁、底部とも約 $\frac{1}{2}$ を欠いている（T16）が、他の一つは崩れていたものの接合復原できた。

#### 遺物 (Fig. 6, 7 PL. 9 10)

遺物は木材の他は土器が数点出土し、うち7点が図化できた。このうちT11～13は小破片となっている。T11は鉢で淡茶色を呈する。丸底から内湾しながら口縁へのび、体部の上位でさらに外に広がっている。内面は横ナデでなめらかになっており、口縁部外面は横ナデの後にナデ調整をしている。底部近くはヘラ状のものでナデられその痕跡が条痕状となって残っている。精良な胎土を用いており焼成も良好である。T12は脚径11.8cmの脚部で、上部の器形を明らかにしえないが脚付鉢であろうか。黄色をおびた茶色で、胎土はわずかに小砂粒を混入している。脚端部は内外面とも横ナデ調整されている。T13は高坏口縁部で、坏部屈曲部から下部を欠いている。内面は赤茶色で外面はうす茶色を呈している。胎土は精良で焼成はよい。口径は16.6cmで内面はミガキが加えられている。T14は脚部を欠く高坏の坏部である。外面は茶色で内面は灰茶色を呈する。胎土は2mm大の砂粒をわずかに含んでいる。坏部屈曲部は外面に稜を持っています、口縁部へは直線的にのび口縁部近くで小さく外湾し、端部を丸くおさめている。調整はたいへん丁寧で屈曲部より下半の外面は横ナデ後に斜めのミガキで、上半は同じように横ナデ後に斜めの細かいミガキを加えており暗文風の効果を出している。内面は口縁端部をハケ目した後に屈曲部上半に細かい縦のミガキを施している。T15、16は竪穴の底部で出土した甕である。T15の甕は口径17.1cm、器高28cm、胴部最大径24cmを測る。丸底に倒卵形に近い球形の胴部がつき、く字形に開く口縁がつく。口縁端は内面にわずかに突出しており、口縁上面は平坦面をつくっている。頸部内面の稜は丸みがある。胴部の最大径は中位にあり、胴下半部の外面には煤が付着している。内面は茶褐色を呈し、胎土に2～3mm大の砂粒を混入している。胴部外面はハケ目で頸部近くは横ハケ目をナデ消している。胴部内面はヘラ削りであるが頸部より約3cm下から施されており、底部より中位までは下から上へ、中位からは右上がりの方向である。T16はT15に比し胴部がさらに球形に近くなり、く字形の口縁部は外に開かず直立ぎみになる。口縁端部は丸みがあり外傾している。外面のハケ目は胴部全面に時計まわりに施されており、やや粗い。内面のヘラ削りはT15と同じであるが下半部は縦方向ではなく左上がりの方向である。外面には煤が付着し、内面は淡黄色を呈する。

#### 第2号竪穴、第3号竪穴 (Fig. 4)

第2号竪穴は第1号竪穴の南側に接近して検出したもので、隅丸長方形に近い不整形の平面

形をしている。長径160cm、短径92cm、深さ30cmを測る。遺物は縄文式土器、弥生式土器、土師器が16点出土したがすべて小破片である。第3号竪穴は深さ30cmで、同じように不整形のプランをし、第2号竪穴と同じように人為的なものではなく自然の落ちこみと考えられる。

#### 遺物 (Fig. 8, 9 PL.11)

T21は縄文式土器の口縁部小破片である。灰茶褐色を呈し、胎土に滑石粒を含有している。口縁上面は窪み、口縁下外面に2条の凹線が見られる。T31も縄文式土器の口縁部で、茶褐色で同じように滑石粒が入っている。焼成は堅く、外面に凹線が横と斜めに走っている。T32は高杯の口縁部と考えたが端部が磨耗しているためか尖りぎみである。色調は赤茶色で精良な胎土が用いられている。内外面とも横ナデ後にナデ調整をし、さらにミガキを加えている。T33~37は甕の口縁部である。いずれもく字形口縁で、端部のつくりに微妙な違いが見られる。T33は内湾ぎみにのび端部は内側に小さく突出している。T34は直線的であり、端部外面を強く横ナデしている。T35は口径15.8cmで、口縁端内側の突出は小さく丸みがある。T36は他に比して肥厚しており、端部内面への突出はなく口縁下外面に小さな段を持つ。T37は口径15.8cmで、口縁端部は丸く内面はやや凹状となっている。T38は底部と口縁部を欠いているが小型丸底壺であろう。頸部は内面に稜があり、内外面ともに細かい横ハケ後に横ナデしている。胴部外面は、中位を細かいハケ目で下半は粗いハケ目である。内面は時計まわりのヘラ削り後に指で上下に押えている。赤茶色を呈す。

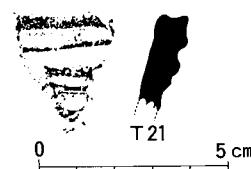


Fig. 8  
第2号竪穴出土遺物実測図  
(縮尺1/2)

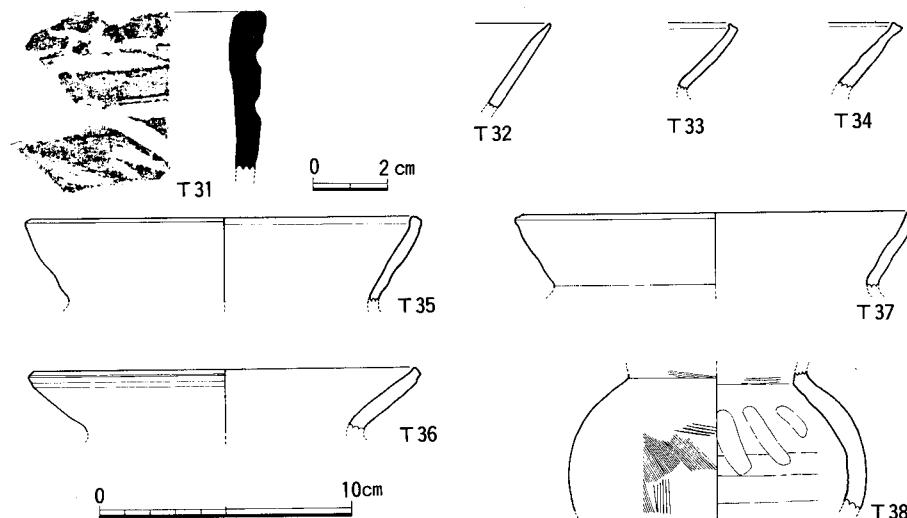


Fig. 9 第3号竪穴出土遺物実測図 (縮尺1/2, 1/3)

### 第4号竪穴 (Fig.10 PL. 6)

試掘時に検出していた竪穴であるため東壁が一部崩落している。上面プランは方形に近い長方形で長辺108cm、短辺93cm、深さ77cmを測る。竪穴内の土は砂質灰黒色で層位的変化は見られなかった。遺物は縄文式土器、土師器、石鍋、鉄滓で、これらの遺物は底にまとまって出土したわけではない。またすべて小破片で7点のみが図化できた。

### 遺物 (Fig.11 PL.12)

T41~43は土師器の小皿で、いずれも磨滅がはげしい。T41は精良な胎土を用いており焼成はよい。内面は横ナデであるが外面と底部の調整は磨滅のためか明瞭でない。T42は底部からの立ちあがりが丸みを持っている。内外面とも暗褐色を呈する。T43の復原口径は10.6cm、底径8.6cmを測る。T44は丸底杯で、口縁部が小さく外湾している。内外面とも横ナデ調整で胎土にわずかに石英砂粒を混入している。T45は杯の口縁部で、端部を内側に小さく折りかえしている。内外面とも横のヘラ磨きを加えている。外面は赤褐色、内面は暗褐色を呈する。T46は高台付椀の底部で、高台部は横ナデ調整である。T47は小さく外反した口縁部を持つ甕で、口縁部は横ナデ、頸部下半は縦ナデ、内面は横ナデ調整である。内面は茶褐色、外面は黒褐色を呈する。

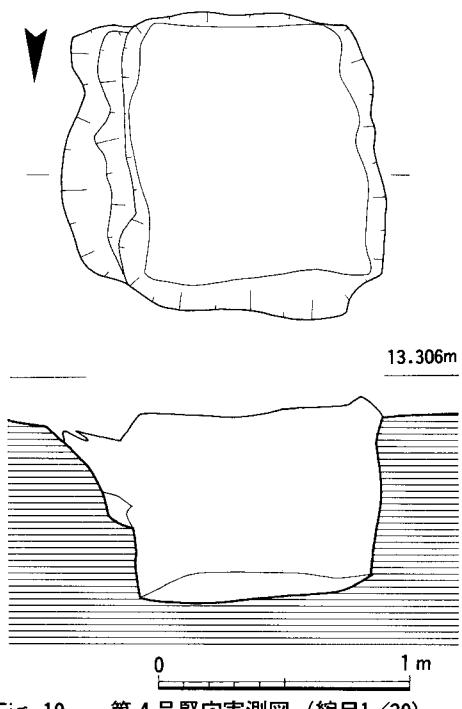


Fig. 10 第4号竪穴実測図 (縮尺1/30)

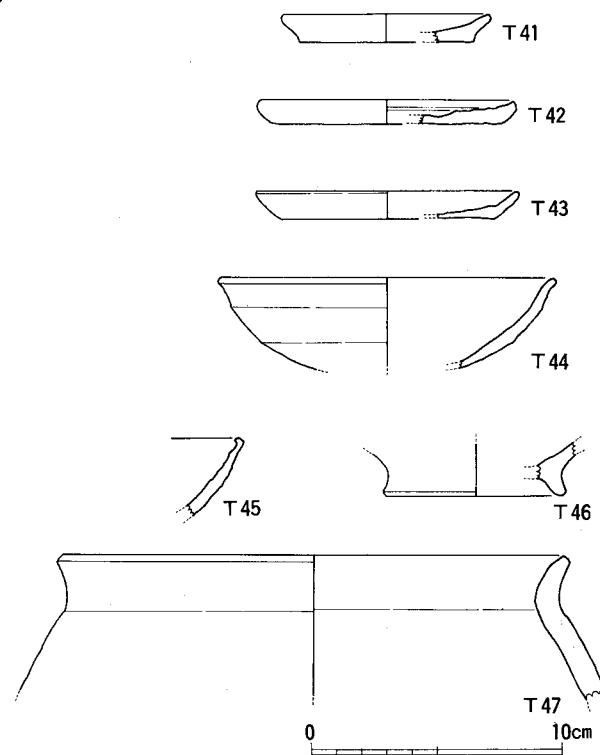


Fig. 11 第4号竪穴出土遺物実測図 (縮尺1/3)

### 第5号竪穴 (Fig.12 PL. 5、6)

平面形は、菱形に近い隅丸方形でほぼ垂直に掘りこまれている。長辺は90cm、短辺は88cmで深さは70cmを測る。塙底は東に向かって掘りこまれ傾斜している。この底部に大きさが20~30cm前後の自然石10個を敷き、この上に2個の大きな石を重ねている。この2つの石はいずれも花崗岩で、下の石は55cm×40cm、厚さ20cmの四角形で角は丸みがない。遺物は、土師器、黒色土器、石鍋、須恵器、白磁などが出土したが細片のため図化しえるものは3点のみである。塙底は湧水がはげしい。

### 遺物 (Fig.13 PL.12)

T51は丸底杯である。口径14.8cm、器高3.9cmで、口縁部は小さく外反し、端部を丸くおさめている。胎土にわずかに砂粒を混入しているが粗くはない。外面は横ナデ、底部はナデ。内部はミガキ状の調整で光沢がある。内外面とも濃灰色で、外面は磨滅し砂粒が露出している。T52は黒色土器の高台付椀の底部である。底径は7.6cmで高台の高さは1cmを測る。内部は平行格子状のヘラミガキで、高台部は横ナデ調整である。胎土は精良で焼成は良好である。T53は石鍋の底部で、復原底径は30.8cm。外面には4~10mm幅の縦の加工痕が顕著に残っている。底部はほぼ平坦で、外面は煤が付着している。

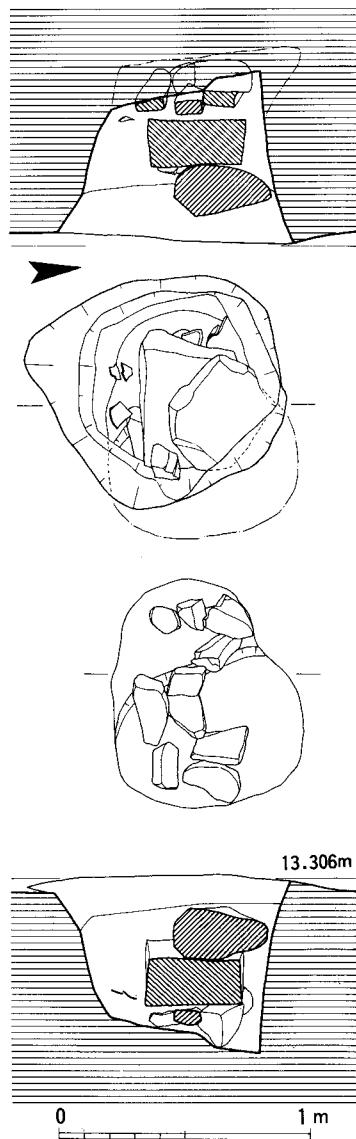


Fig. 12 第5号竪穴実測図 (縮尺1/30)

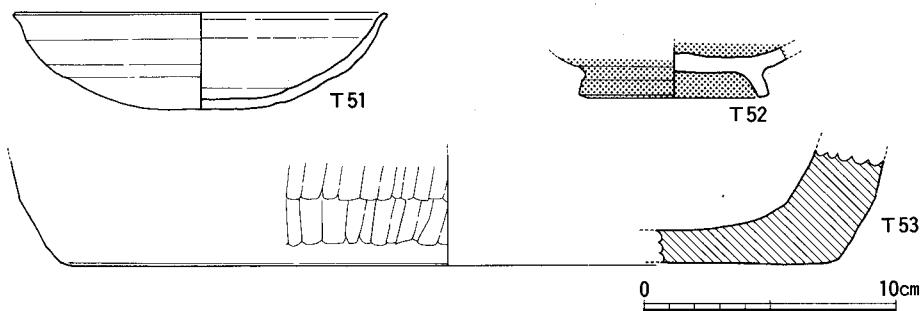


Fig. 13 第5号竪穴出土遺物実測図 (縮尺1/3)

## 第6号竪穴 (Fig.14 PL. 7)

第4号竪穴の西側2mに位置している。平面形は橢円形で、長径150cm、短径127cmを測る。

第1～5号竪穴の埋土が単一の土層で変化がほとんど見られなかったのに対し、第6号竪穴は土層に変化がある。遺物は土師器、内黒土器、石鍋片など100片以上を数えるが、これらの大部分は第1層の黒色炭化物に集中している。

## 遺 物 (Fig.15. 16 PL.13)

T61は土師器の小皿で、復原口径9.2cm、底径6.6cm、器高1.9cm。外面の調整は横ナデで淡黄褐色を呈する。T62～64は土師器の丸底杯である。T62の口縁部は強く横ナデしている。T63は復原口径15.3cm、器高3.9cmで底部には板目状の圧痕が見られる。内面は丁寧な横ナデで光沢がある。胎土は石英粗砂が含まれており、焼成はよい。色調は内面が暗褐色で、外面は淡褐色を呈する。T64は復原口径15.3cm、器高は3.5cmである。内面は櫛歯状のもので搔いて調整し、その後に口縁部にかけて強く横ナデしている。このため口縁部への立ちあがり部に段がある。焼成はよく堅緻である。

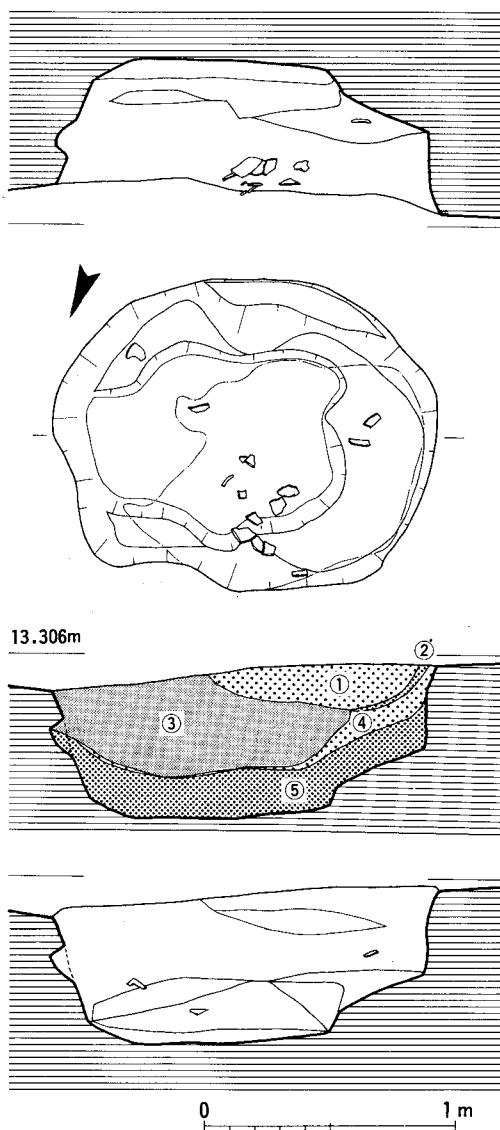


Fig.14 第6号竪穴実測図 (縮尺1/30)

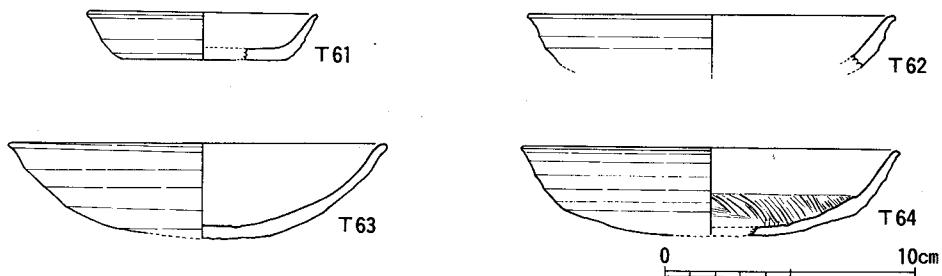


Fig.15 第6号竪穴出土遺物実測図 (縮尺1/3)

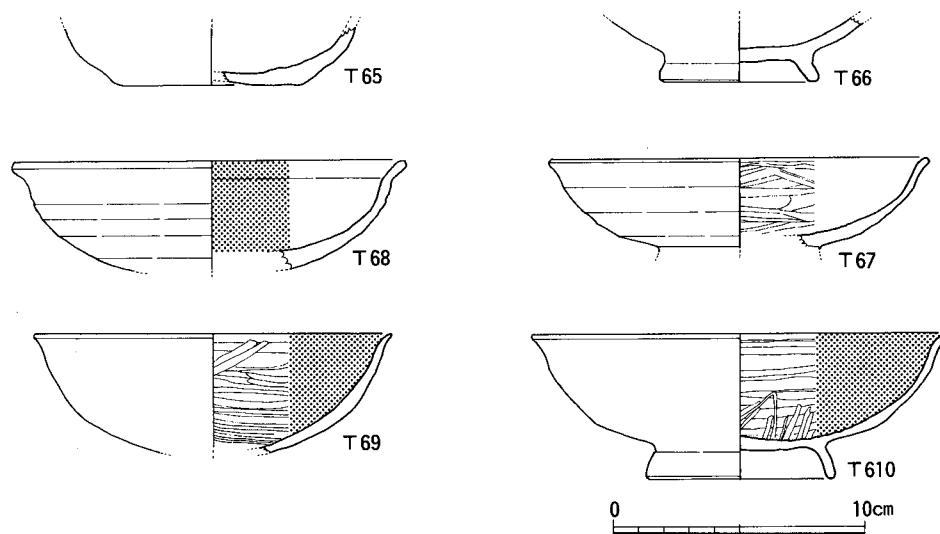


Fig. 16 第6号竪穴出土遺物実測図（縮尺1/3）

T65は底部のみで体部上半を欠いているが土師器の碗であろう。内面は剥離がはげしいために調整痕は明瞭でない。外面は横ナデで底部には板目状の圧痕が見られる。T66は土師器の高台付碗である。高台径は6.4cmを測る。胎土には石英粗砂が入っている。内底部はミガキ状の調整が施され、外底部は横ナデ調整している。T67は復原口径15.2cmで、底部を欠くがわずかに貼りつけた高台が残っており器形が判断できる。外面の色調は淡黄褐色、内面は灰色をおびた褐色である。内面の調整は横方向のヘラミガキで、口縁部外面は横ナデ調整している。T68～T610は内黒土器である。T68の口縁部は体部から明瞭に屈曲し外反している。復原口径15.8cm 口縁部の調整は内面が横のヘラミガキ、外面が横ナデ。体部は内面が横の不連続の縦横の幅広いミガキ調整で、外面は横のヘラ削りである。胎土は石英砂粒が若干混入している。焼成は良好である。T69は深さが4.5cmの丸底杯である。胎土にはわずかに石英砂粒が入っており、胎土の色調は灰黒色を呈する。外面の調整は横ナデで部分的に縦にナデている。内面は横の細かいヘラミガキの後に斜めのミガキを加えている。口縁径は復原値で14.3cmである。T610は高台付碗である。高台は細長く、端部は丸みがある。高台復原径7.4cm、高台の高さ1.1cm、口径16.8cm、器高5.9cmである。口縁端部は先細で小さく外反している。高台外底部には板目状の圧痕が認められる。外面の調整は丁寧な横ナデである。内面は横ヘラミガキで内底部は上下方向のミガキである。外面の色調は淡茶色で、内面は黒色で光沢がある。

第6号竪穴の土層 ① 黒色炭化物土層 ② 暗褐色粘質土層 ③ 暗黄褐色粘質土層  
 ④ 黒色炭化物土層 ⑤ 暗褐色粘質土層

### 第7号竪穴 (Fig. 17)

上面プランは長径85cm、短径77cmの円形で、深さは10cmとかなり浅い。遺物は出土せず時期、性格とも明らかにしえないが、円形のプランであることから他の不整形な落ちこみとは区別した。

### 第8号竪穴 (Fig. 4)

平面形は不整方形で、長辺130cm、短辺120cmを測る。深さは40cmあり、遺物は黒耀石製の打製石鏃1点のみであった。

#### 遺 物 (Fig. 18)

T81は良質の黒耀石を用いた打製石鏃である。いわゆる凹基無茎式で打欠きの調整は丁寧である。脇挟りはあまり深くない。一面に主要剝離面を残している。

## 2 溝 状 遺 構

2条の溝状遺構は、発掘区のⅢ、Ⅳ区とその拡張部で検出したものである。検出順に東から第1～4号溝と呼んだが、南側の延長部では第1、2号が同一の流れとなり、また第3、4号溝についても同じ状況であったために資料整理時に第1、2号溝の2つの流れとして区別した。

### 第1号溝 (Fig. 4 PL. 8)

検出した第1号溝の全長は25mである。溝は南西から北東へ向かっており、北端部では平面的には3つの細い溝となっている。溝の深さは20cm前後ときわめて浅く、北端部と南端部との高低差は5cmでわずかに北に向かって深くなっている。遺物の出土数は少なく、かつ磨滅し小破片のため実測したのは土器2点と石器1点にすぎない。

#### 遺 物 (Fig. 19 PL. 14)

M11は縄文式土器で、いわゆる刻目突帯文土器の口縁部である。胴部から直線的に内傾しており、口縁端部はわずかながら平坦面をつくっている。口縁部より5mmさがった位置に断面三角形の突帯がめぐっている。この突帯には左からの刻み目が約1.1cm間隔でいれられている。

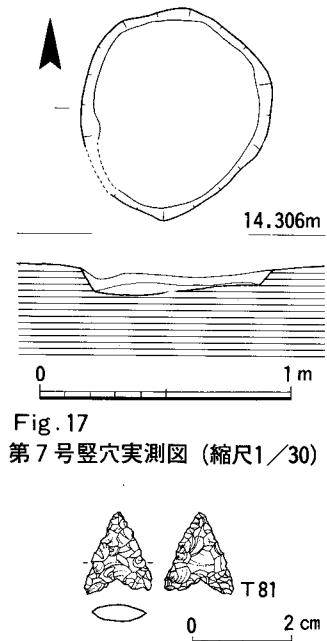


Fig. 17  
第7号竪穴実測図 (縮尺1/30)

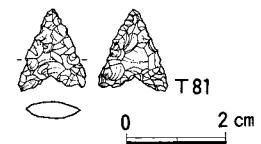


Fig. 18  
第8号竪穴出土遺物実測図  
(縮尺2/3)

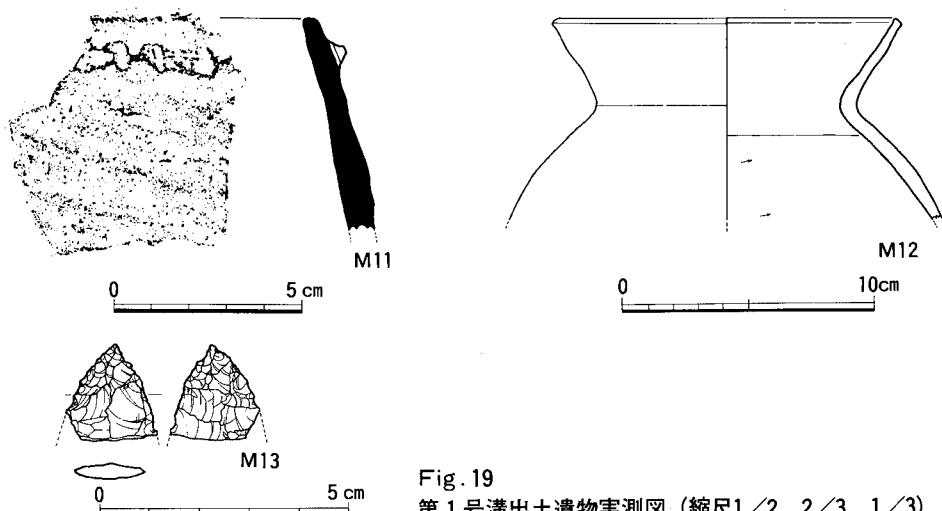


Fig. 19  
第1号溝出土遺物実測図（縮尺1/2、2/3、1/3）

胎土には小砂粒が多く入っており、焼成はよく堅い。口縁と突帯部は横ナデしており、突帯部下半はナデている。やや凹凸がめだつ。内面は時計まわりの横ナデ、外面は茶色、内面は灰黒色を呈する。M12は土師式土器の甕である。く字形の口縁部は微妙に湾曲しながらのびる。端部上面は外傾し、内側に小さく突出している。調整は口縁部の内外面が横ナデ、胴部の外面はナデ、内面は屈曲部の約1cm下方より右上がりのヘラ削りである。焼成はよく、胎土には小砂粒がかなり多く含まれている。内外面とも灰茶褐色を呈している。M13は打製石鏃で、黒耀石製である。表裏の調整は主要剝離面を残してはいないが、調整剝離数はあまり多くない。

## 第2号溝 (Fig. 4 PL. 8)

第2号溝は第1号溝の西側8mの位置で検出したもので、同じように南西から北東に向かってのびている。溝底部は凹凸がめだち、深い所は溝の岸より60cmあるが浅い所は10cm足らずである。第1、2号溝は、さらに両端部へのびるものと考えられる。第2号溝の出土遺物は第1号溝に比べかなり多く、縄文式土器が大部分を占めている。

## 遺物 (Fig. 20, 21 PL. 15~17)

M21~28は縄文式土器である。M21~23は口縁部の特徴がよく類似している。M21は内面が黒褐色、外面は灰暗茶色を呈している。胎土には小砂粒が多く入っており、焼成はよく堅い。口縁部は胴部から外傾しながら直線的にのび、その端部で小さく外反している。突帯は上端より7mm下に貼りつけられており、背のひくい断面三角形をなす。調整は内外面とも横ナデである。突帯には1.2cm間隔で刻み目が施されているが、切り込んだものではなく強く押しつけている。刻み目は突帯部だけではなく口縁外端部にも突帯部と同じような間隔でつけられている。

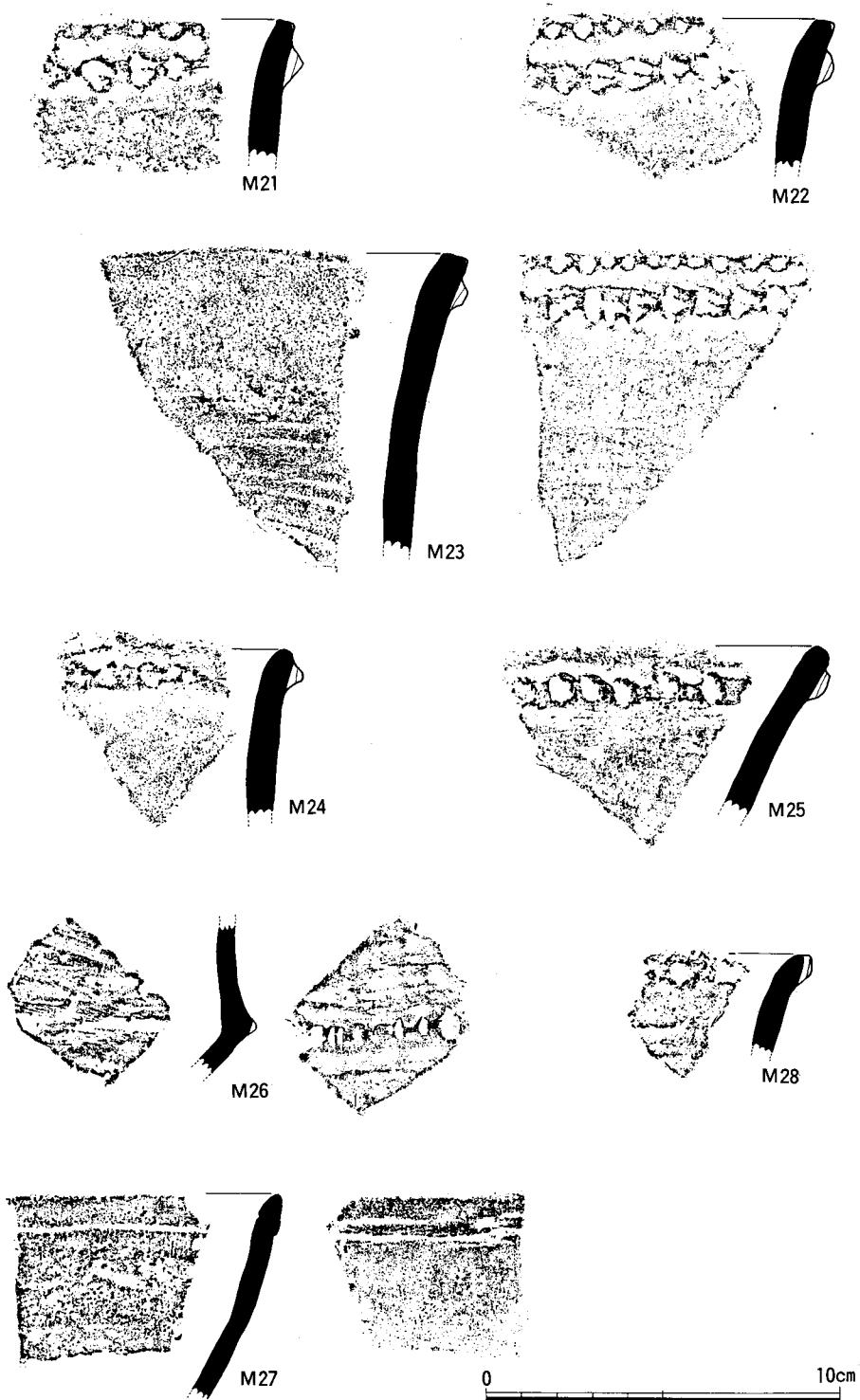


Fig. 20 第2号溝出土遺物実測図（縮尺1/2）

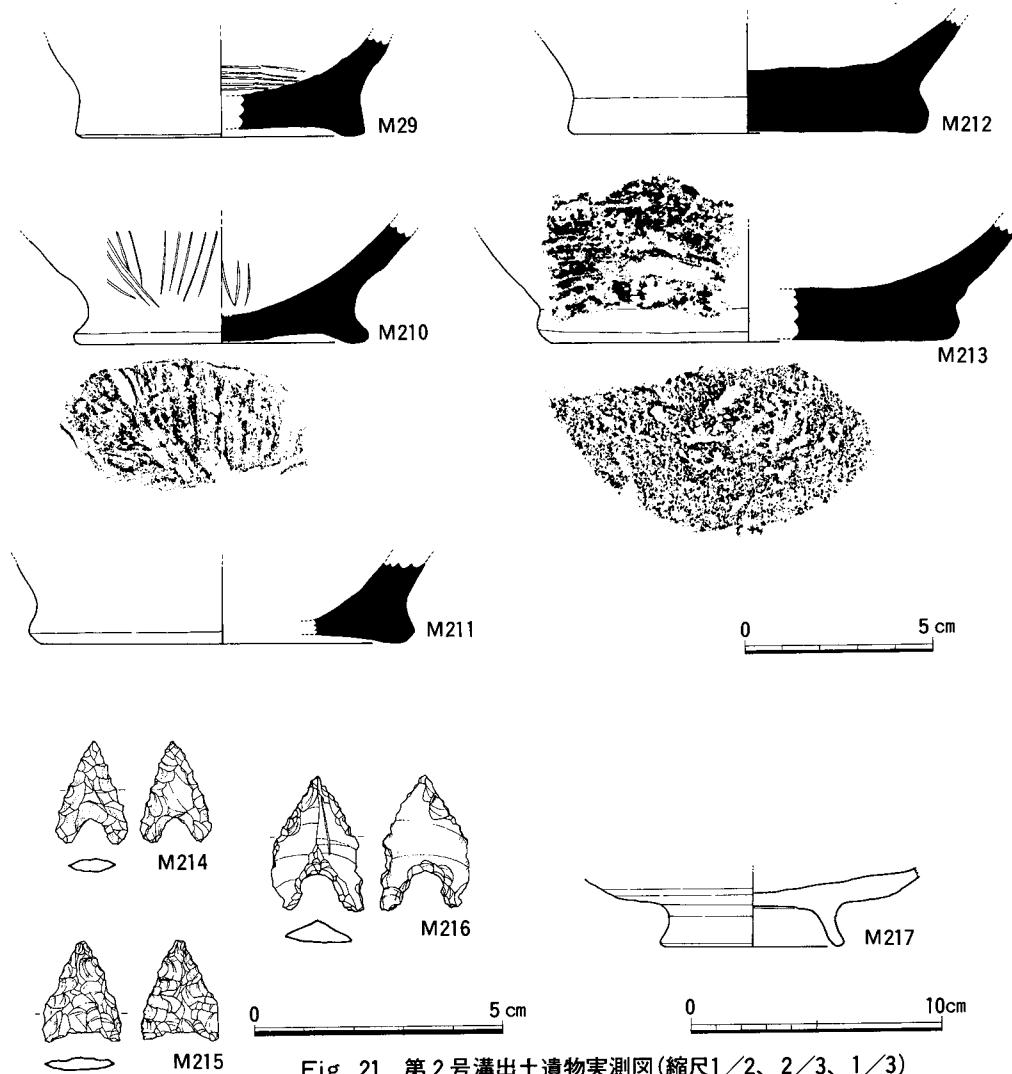


Fig. 21 第2号溝出土遺物実測図(縮尺1/2、2/3、1/3)

M22も同じような特徴を持つ突帯文土器である。色調は内面が黒色、外面は灰褐色を呈する。胎土は小砂粒が多く粗い。調整は内面がナデ、外面は横ナデで丁寧に施されている。M21に比べ口縁端部の外反がやや強く、突帯の貼りつけも背が低い。刻み目は同じように口縁外端部と突帯部につけられ、突帯部の刻み目は偶蹄目の蹄跡の形をしている。M23はやや大きめの破片である。胎土は1～2mm大の小砂粒が多く見られ、緻密ではない。外面の調整は右方向にヘラナデした後にナデを加えている。内面は口縁部近くがナデで、下方は横に条痕が残っている。内外面とも茶色を呈する。M24は口縁上端部が丸みを持つ突帯文土器である。口縁部はほぼ垂直で、口縁外端よりわずかにさがったところに断面蒲鉾形の突帯をめぐらしている。刻み目は

浅い。胎土は小砂粒が多く粗い。内面は灰茶色、外面は茶褐色を呈す。内外面ともかなり磨滅しており調整法は明らかにしない。**M25**は大きく外反しており、胴部で屈曲部をつくり底部へ続くのであろう。胎土は小砂粒が多いが焼成はよく堅い。色調は内外面ともに灰黒色である。口縁下の突帯は断面蒲鉾形で、刻み目は等間隔でない。外面の調整は時計まわり方向の粗いナデである。**M26**は胴部屈曲部である。底部から外湾しながらびてできた胴部の内側の粘土を接合して直立する胴上半部をつくっている。刻み目をこの屈曲部に左方向からついているが深さ、間隔とも不規則である。調整は屈曲上半部の内側は逆時計まわりの粗いヘラナデ。屈曲下半部には煤がわずかに付着している。内面は黒色、外面は茶色の色調を呈している。胎土はわりに精良で焼成もよく堅い。**M27**は内外面茶色をした口縁部で、破片のために形状を知りえない。小砂粒を多く含有した胎土で焼成はよく堅い。わずかに雲母片が見られる。調整は内外面ともに丁寧にナデられており、内面はなめらかである。口縁端部は丸く尖っており、内面に1条、外面に2条の浅い沈線がめぐっている。**M28**の刻み目は浅く口縁上端までは達していない。胎土に小砂粒を多く含んでいる。**M29～213**は底部である。**M29**は内面が黒色で外面が茶褐色をしている。調整は外面がナデ、内面には粗いハケ目である。**M210**は底部外端部が外側に張り出している。胎土の小砂粒は少量で焼成はよい。内外面ともに粗い縦の条痕が見られる。**M211**は復原底径10.2cmで、全体が磨滅し調整法を明らかにしない。**M212・213**は底部外端部の外への張り出しは小さく、かつ底部が上げ底ではなく平坦となっている。**M212**は外面は赤茶色、内面はうすい茶色で、胎土は精良ではないが砂粒少なく密である。**M213**は復原底径9.6cmを測る。内面の調整は横方向の粗い条痕をナデ消している。外面は粗い条痕が見られる。底部は粗いヘラナデ調整である。**M214～216**は打製石鏃である。**M214**は安山岩製でいわゆる凹基無茎式である。表裏面の調整は丁寧ではない。**M215**は黒耀石製である。基部はわずかに抉りが見られるが平基式に近い。**M216**も黒耀石製で、いわゆる剝片鏃である。石刃状剥片を用い基部を凹基式に加工している。鏃長は2.7cmである。**M217**は土師器の高台付小皿である。高台は貼り付けで端部は丸みがあり、外へ広がっている。高台径7.4cm、口縁部をわずかに欠いているが口径は14cm前後であろう。内面はミガキが加えられている。高台は横ナデ調整である。

### 3 表採、耕作土の遺物 (Fig.22、23 PL.17～19)

ここで取りあげる遺物は、竪穴、溝状遺構より出土したものではなく、耕作土、床土とその下層である灰茶色土層より出土したもので、さらに表採と試掘時の遺物を加えた。

H 1～3 は黒耀石製の打製石鏃である。H 1 は凹基無茎式の石鏃で良質の黒耀石が用いられ

ている。鎌長は1.4cmである。H 2 は平基式で表裏に主要剝離面を残さず調整は丁寧である。鎌長2.2cm。H 3 は脚端を欠いているが、鎌長は3.5cm前後になると思われる。凹基式で抉りは深い。H 4 は磨製石鎌で茎部を欠いている。鎌は切先まで通っていず、全体がやや剝離しているためか刃部、鎌ともに鋭利でない。堅緻な粘板岩質の石材が用いられている。H 5 ~ 8 は縄文式土器である。H 5 は小破片で全形を知りえないが、口縁部は山形が連続するのであろう。内外面とも茶色である。H 6 は直立する口縁上端部は凹凸となっている。胎土に滑石粒の混入が見られ、表面はなめらかである。H 7 も同様に表面の調整はなめらかとなっている。口縁上端部は凹状となる。H 8 は底部で外面は縦の粗い条痕を横にナデ消している。H 9 、H 10 は高環脚部である。H 9 の脚部は円柱状で坯、脚裾部を欠く。赤茶色の色調を呈し、脚内側は逆時計まわりのヘラ削りである。H 10 も同様に脚部のみである。外面はハケ目調整。H 11 ~ 14 は須恵器である。H 11 、H 12 は坯蓋で、ともに灰色を呈し堅緻な焼成をなす。H 13 、H 14 は高台付小碗で、H 14 の高台は復原径6.4cmあり、底部と体部との屈曲部より内側に貼り付けてある。H 15 ~ 19 は高台付碗の底部で、H 15 ~ 17 は土師器、H 18 、19 は黒色土器である。H 15 の高台はほぼ垂直であるがH 16 は内傾しており、H 17 は高台の中位で屈曲している。いずれも磨滅がはげしい。H 18 は精良な胎土が用いられており、焼成もよい。調整は丁寧で内面はミガキでなめらかである。H 19 の内底部にも横方向のミガキが加えられている。高台径は7.0cmである。H 20 は土師器の丸底杯である。密な胎土であるが2mm大のやや大きめの砂粒が入っている。内面の調整は横ナデ後にナデ。うすい茶色を呈する。H 21 は内黒土器で、底部を欠いているが高台付碗となるのであろう。体部下半部の外面は時計まわりのヘラ削りで、上半部は凹凸がめだち4条の沈線状となっている。内面は細かいヘラミガキで光沢を持っている。H 22 ~ 26 は中国製磁器である。H 22 は玉縁口縁を持つ白磁である。釉は均一の厚さに施釉されている。H 23 は白磁の皿底部である。釉色は黄色をおびた白灰色で底部近くは施釉されていない。H 24 は白磁碗で、見込みには段があり、わずかに砂が付着している。釉は灰白色で高台は露胎である。削り出した高台径

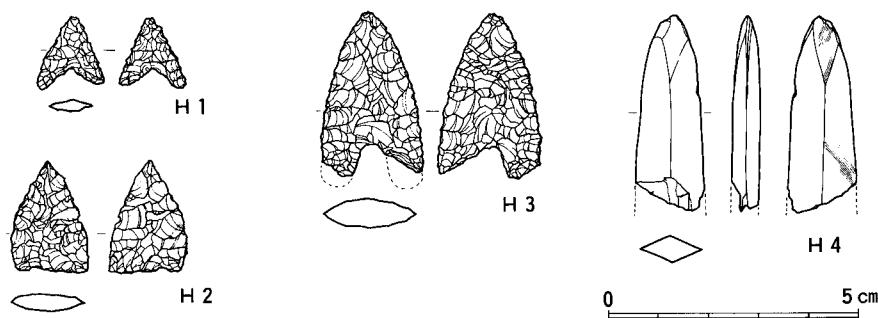


Fig. 22 表探、耕作土出土遺物実測図（縮尺2/3）

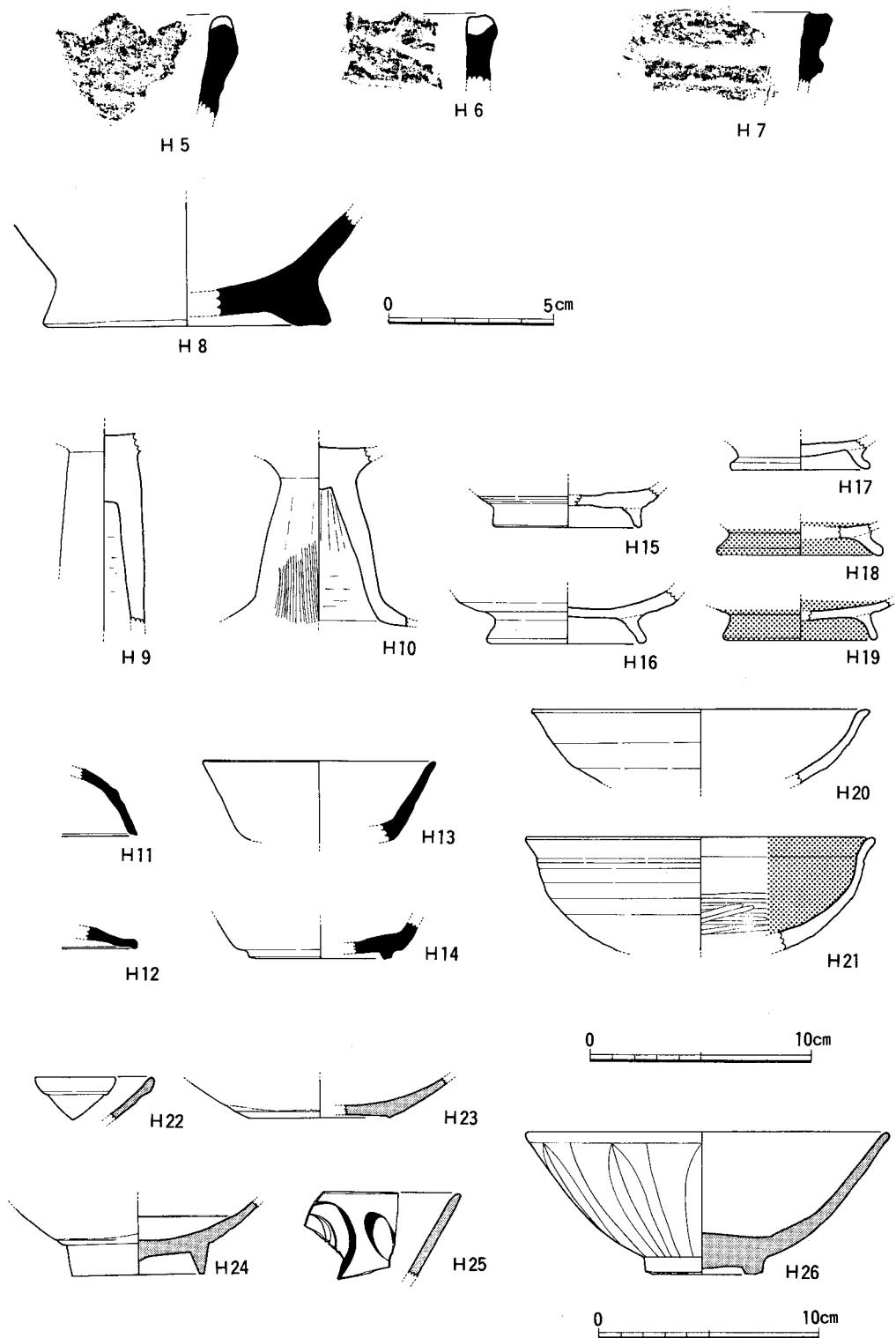


Fig. 23 表採、耕作土出土遺物実測図 (縮尺1/2、1/3)

は6cmである。H25は青磁碗の口縁部で、釉は灰色をおびた緑色で内外面とも貫入がある。焼成はよく、胎土には黒色微粒子ではなく灰色を呈する。H26は鎬葉文を持つ青磁碗である。復原口径16.5cm、高台径5.4cm、器高6.5cm、鎬葉文の陽刻はあまり深くないがたしかな彫りである。釉は濃緑色で高台畳付と高台内は施釉されていない。見込内底部には厚くたまっている。内外面ともに大きな貫入がある。

### III おわりに

約1か月間という短期間の調査であったが、堅穴と溝状遺構を検出した。堅穴は総数31基であるが、大半は自然の落ちこみと判断し、8基の堅穴についてのみ報告した。これら8基の堅穴でも平面形が不整形ではなく、出土遺物があり、かつ遺物の時期に混乱がないなどの条件を満たしているのは第1、4、5、6号堅穴の4基のみである。第1号堅穴は、遺物から4世紀後半頃の時期が考えられる。また遺物の出土状況や高環脚部に見られる人為的な破損は、祭祀行為を推測させるが、いまその対象を明確にしえない。第4、5、6号堅穴は、出土遺物の土師器、内黒土器から10世紀を中心とする時期が考えられる。第4、5、6号堅穴は底部からの湧水がはげしく墓地とは考えがたいが、第5号堅穴の石組み、第6号堅穴の炭化物土層などから墓制に関連する遺構という推測が可能かもしれない。2条の溝状遺構の出土遺物は、第2号溝に縄文式土器の出土数が多いという傾向はあるものの、弥生時代から中世までの遺物が混在しており、時期差は決められなかった。またあまりにも浅いことなどから自然の流れと判断した。溝状遺構や耕作土より出土した縄文式土器は後期初頭から晩期まであり、南1.5kmに位置する四箇遺跡とほぼ同じ時期を示している。発掘当初、高柳遺跡は沖積地という立地から水田耕作に関連する遺構の存在が予想されたのであるが、発掘は予想を裏切る結果となった。しかし水田遺構と直接関係のない堅穴などの遺構は、逆に10世紀頃の早良平野での遺跡のあり方を示すもので、すでにこの時期には平野部の開拓は終了して、集落は定着化し、土地が多目的に使われていたのではないかと思われる。現在、高柳遺跡の西側隣接地にあたる田村団地内で発掘調査が実施されており、高柳遺跡で明確にしえなかった各遺構の性格、あるいは四箇遺跡をはじめとする周辺遺跡との関連など明らかにされるものと思われる。

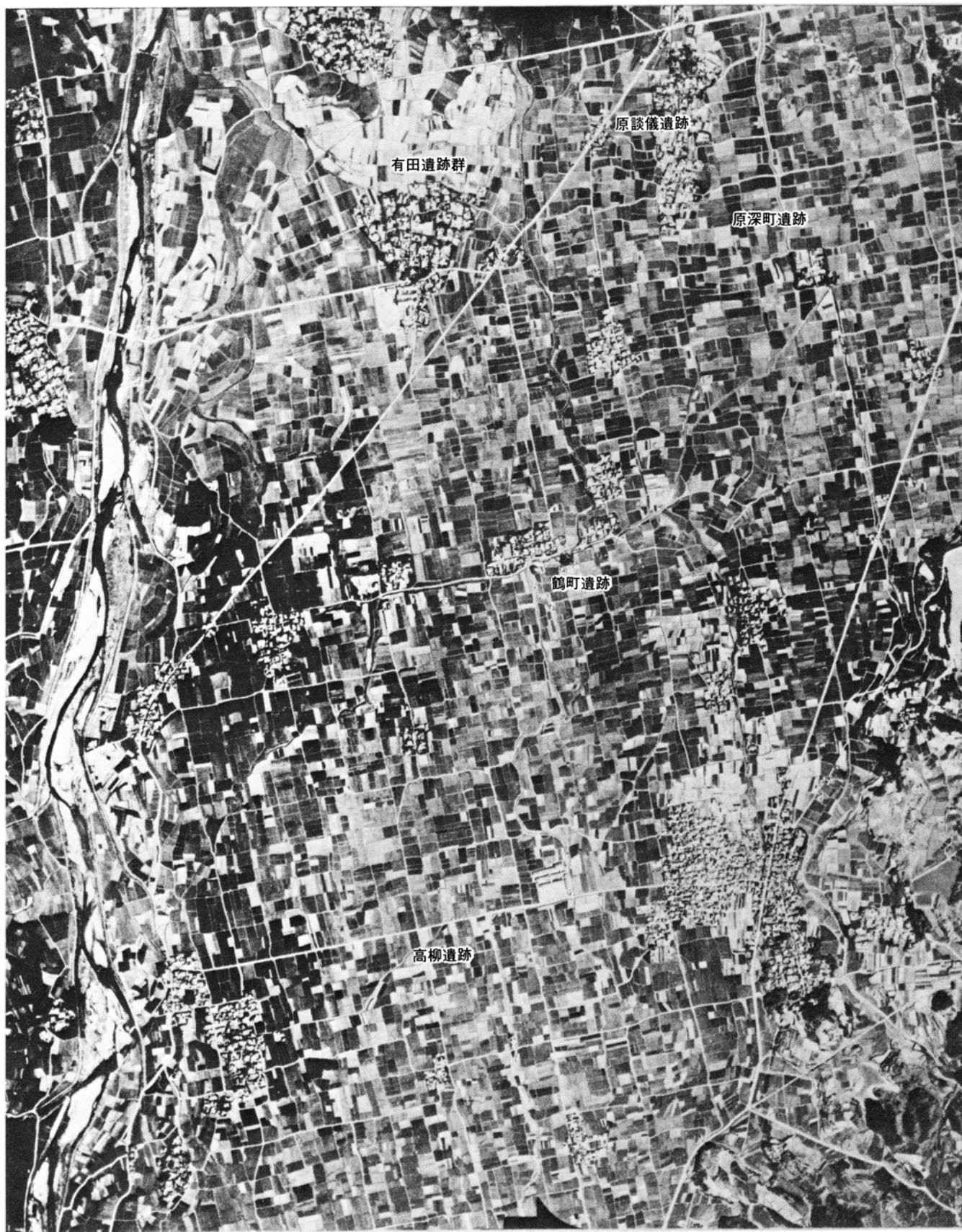


▶田村団地内遺跡全景(1981年2月)

# 図版



高柳遺跡発掘風景 1978年10月



高柳遺跡周辺航空写真（昭和21年撮影 縮尺約1/15,000）





高柳遺跡周辺航空写真（昭和49年撮影 縮尺 1/15,000）





▲発掘区全景（東から）

発掘区全景（西から）▼







▲第1号豎穴

第1号豎穴遺物出土状况▼





PL. 5



▲第4号竪穴

第5号竪穴▼







▲第5号竪穴

第5号竪穴遺物出土状況▼







▲第6号竪穴

第6号竪穴遺物出土狀況▼





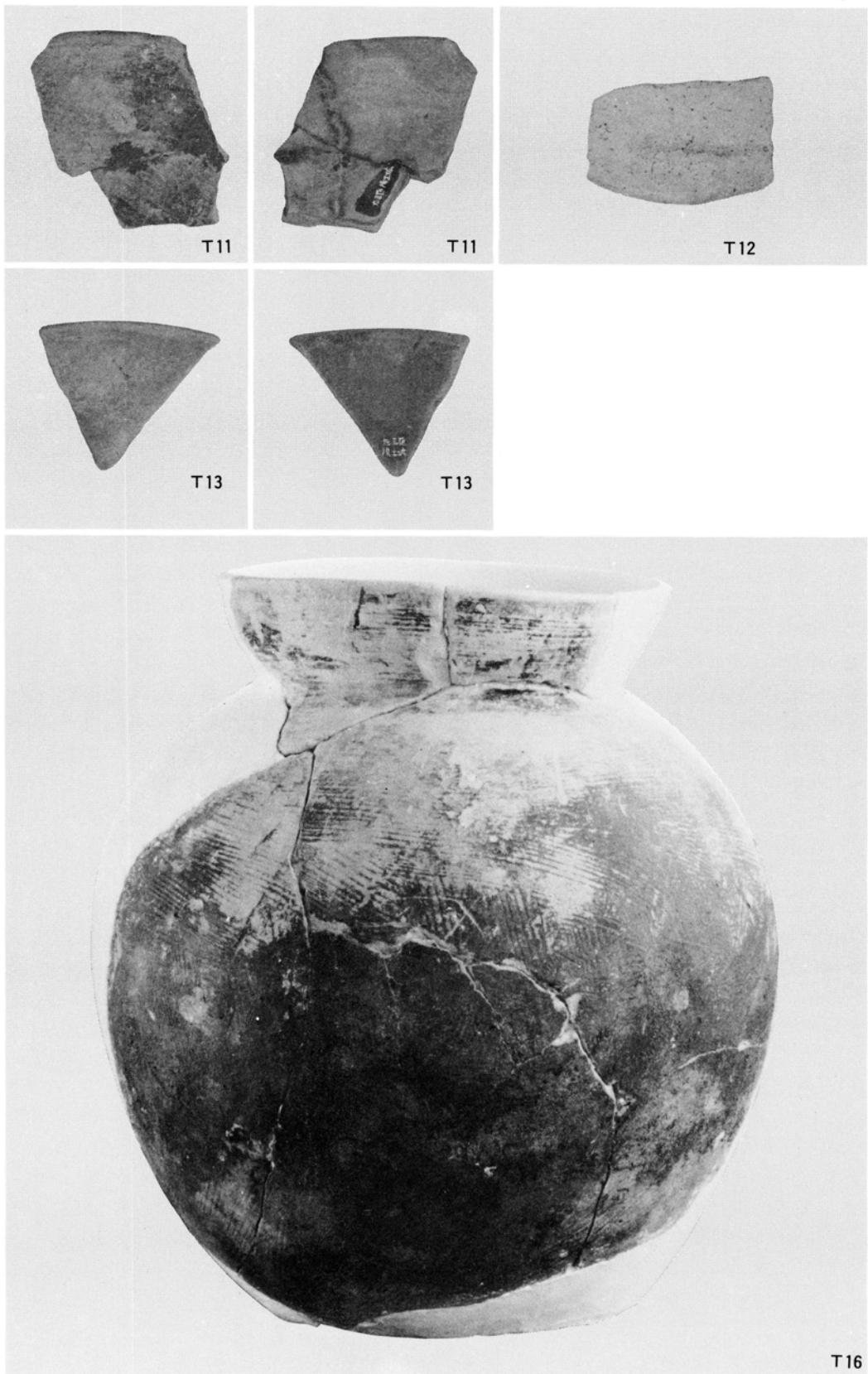


▲溝状遺構（北西から）

溝状遺構（南東から）▼







第1号竪穴出土遺物





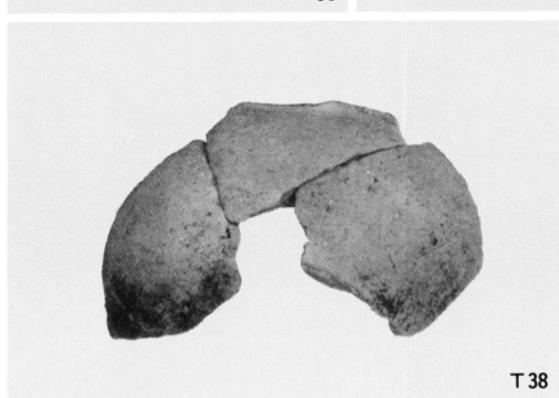
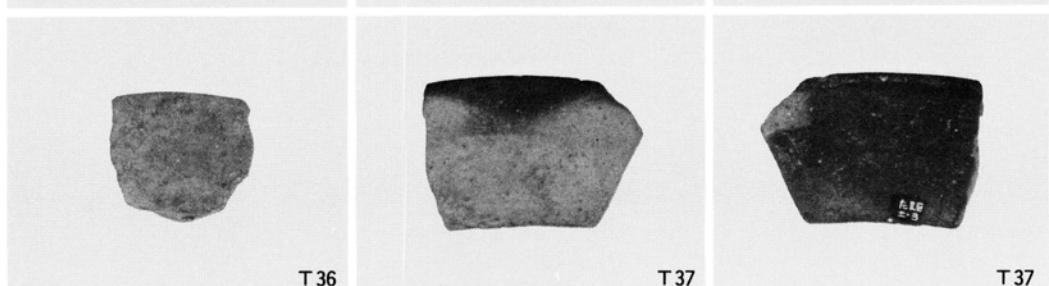
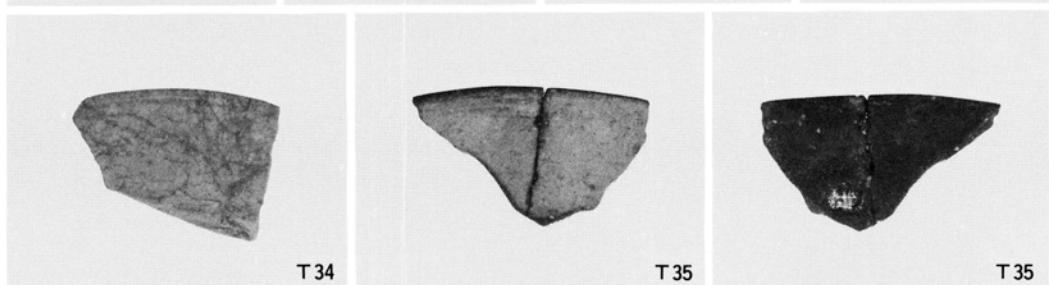
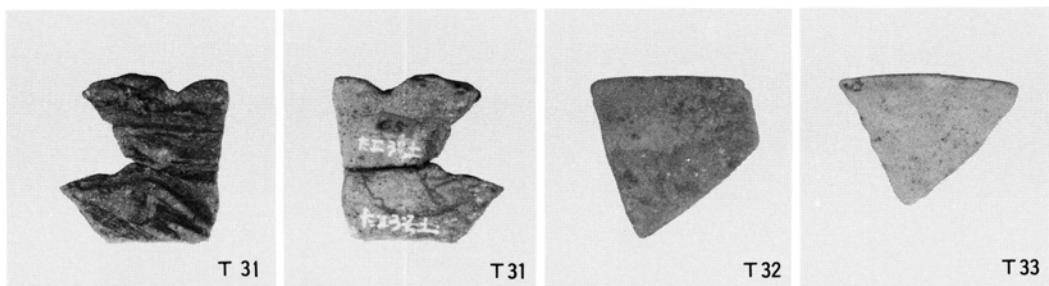
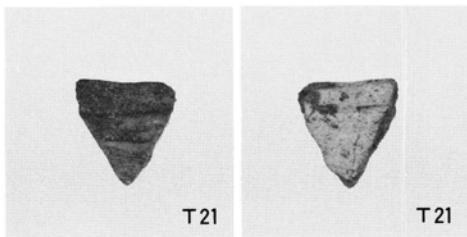
T 14



T 15

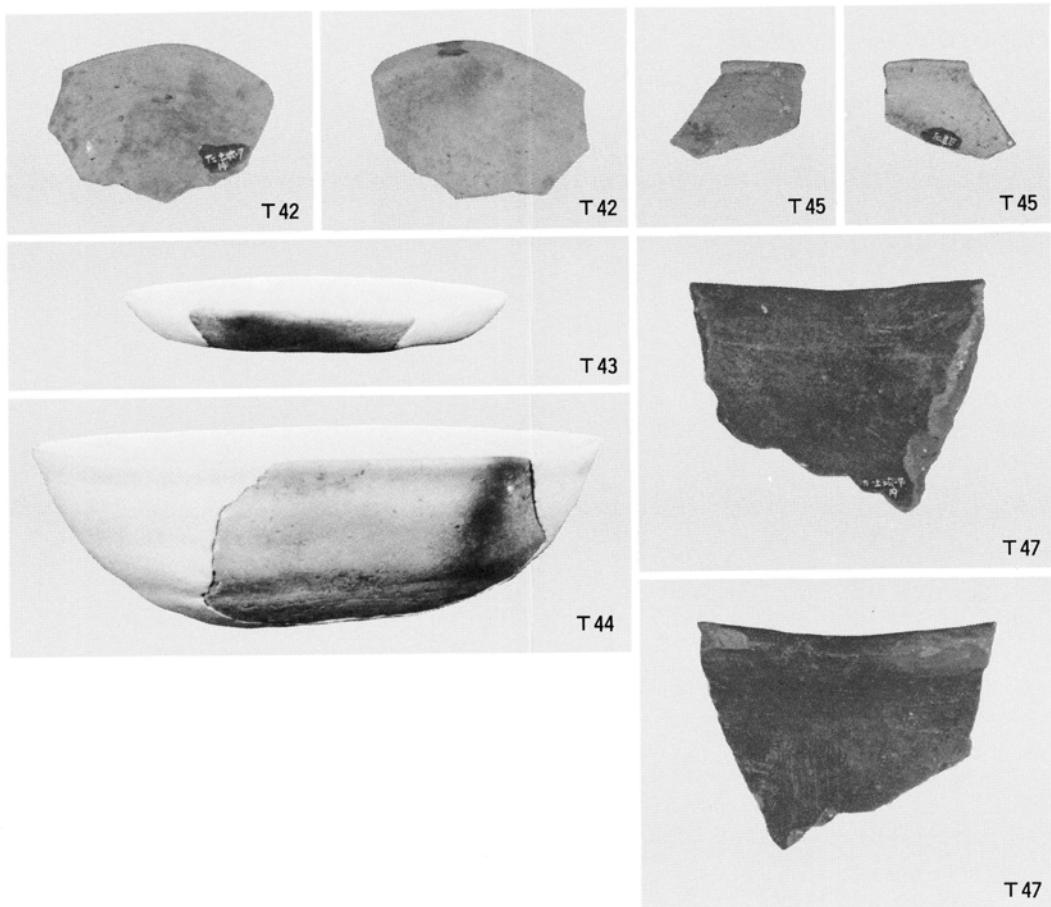
第 1 号 穹穴出土遺物





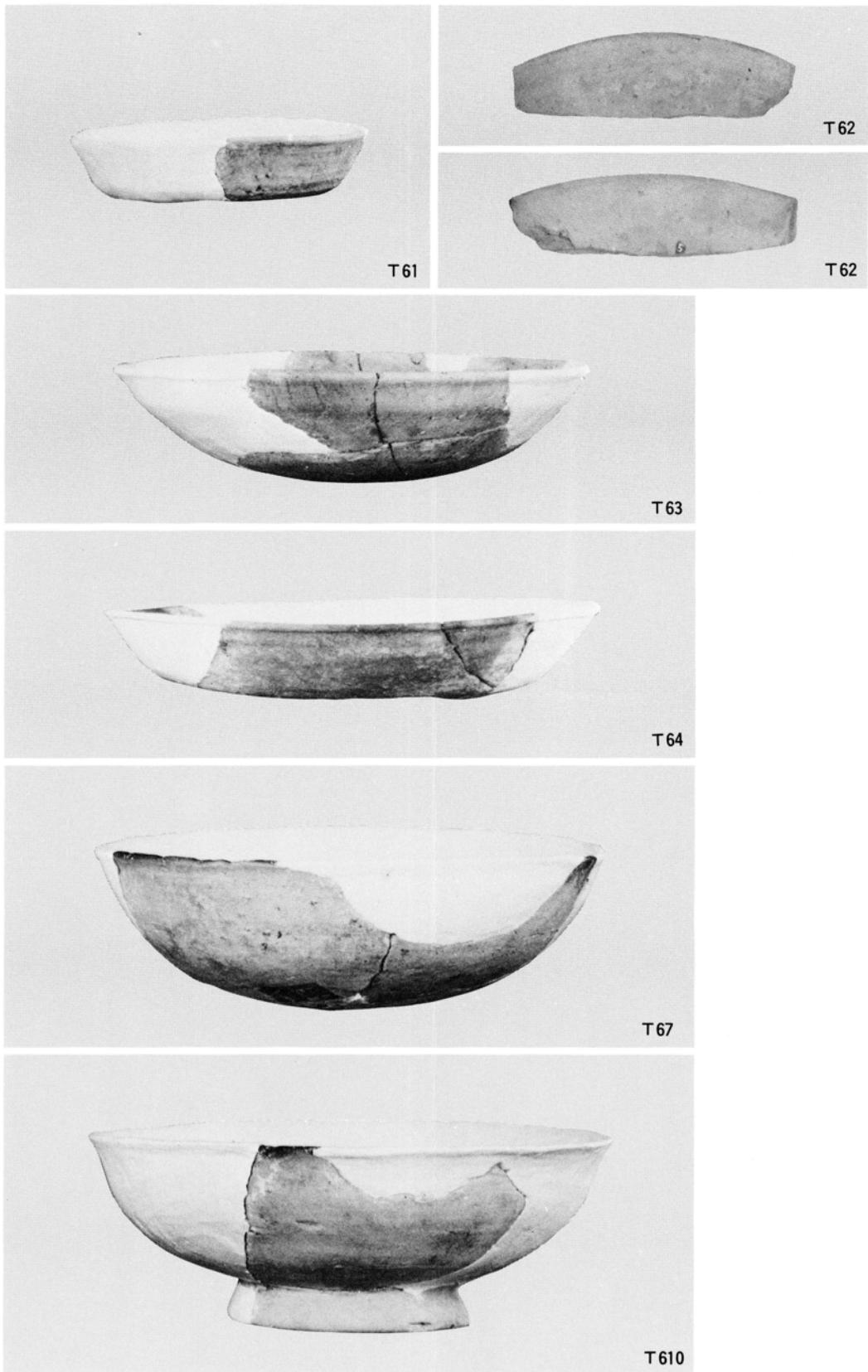
第2、3号竖穴出土遗物





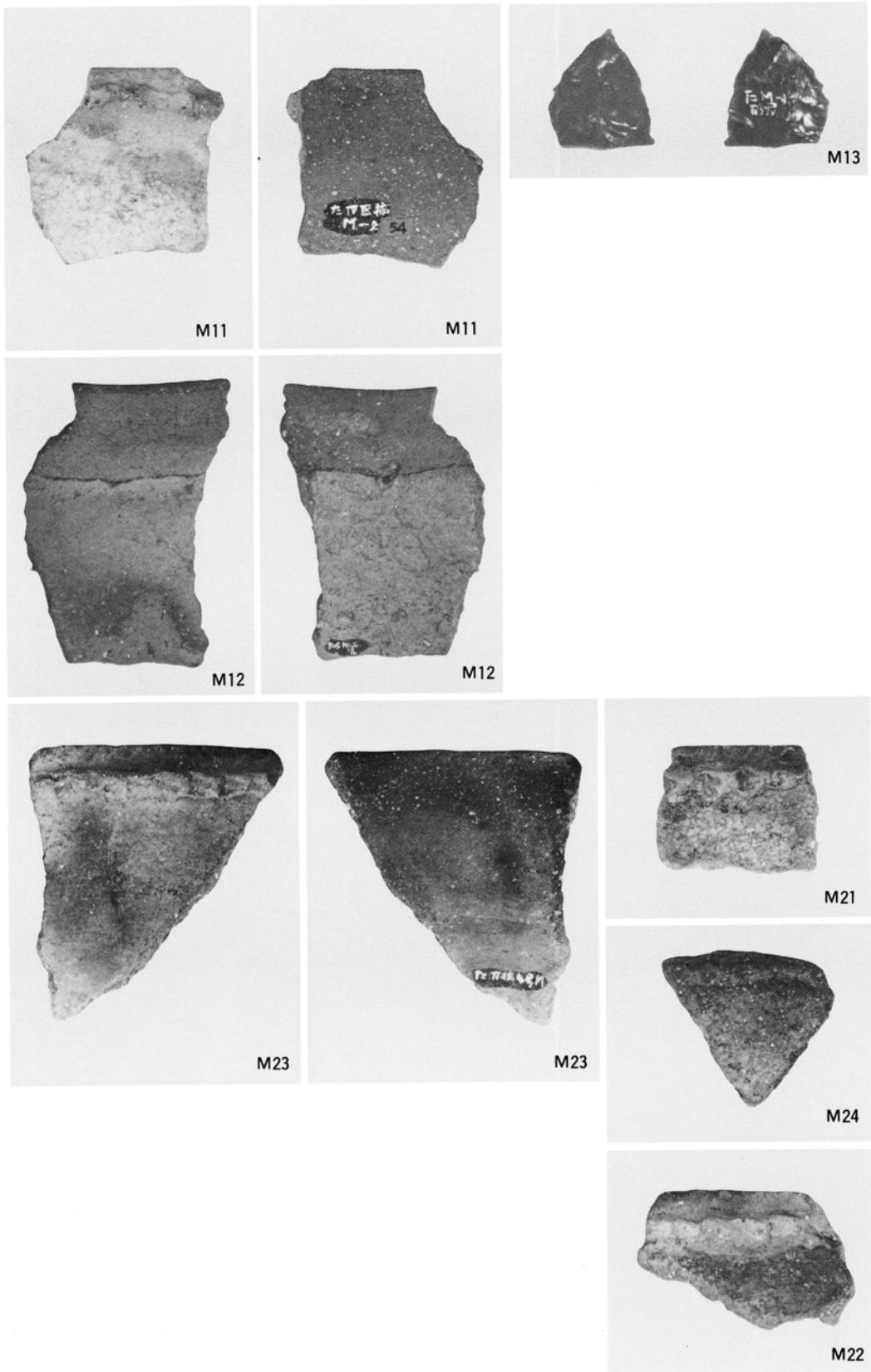
第4、5号竪穴出土遺物





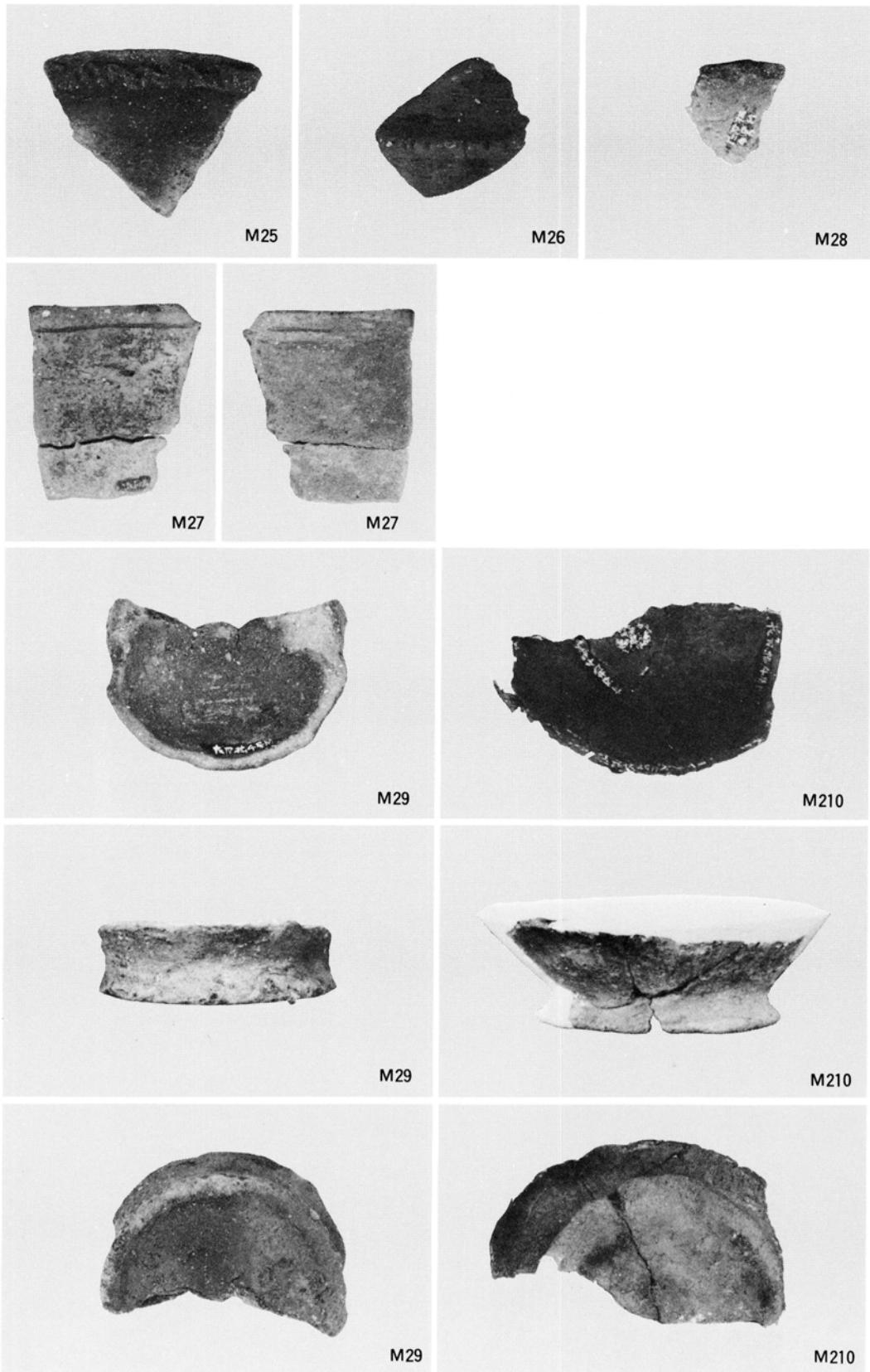
第6号竖穴出土遗物





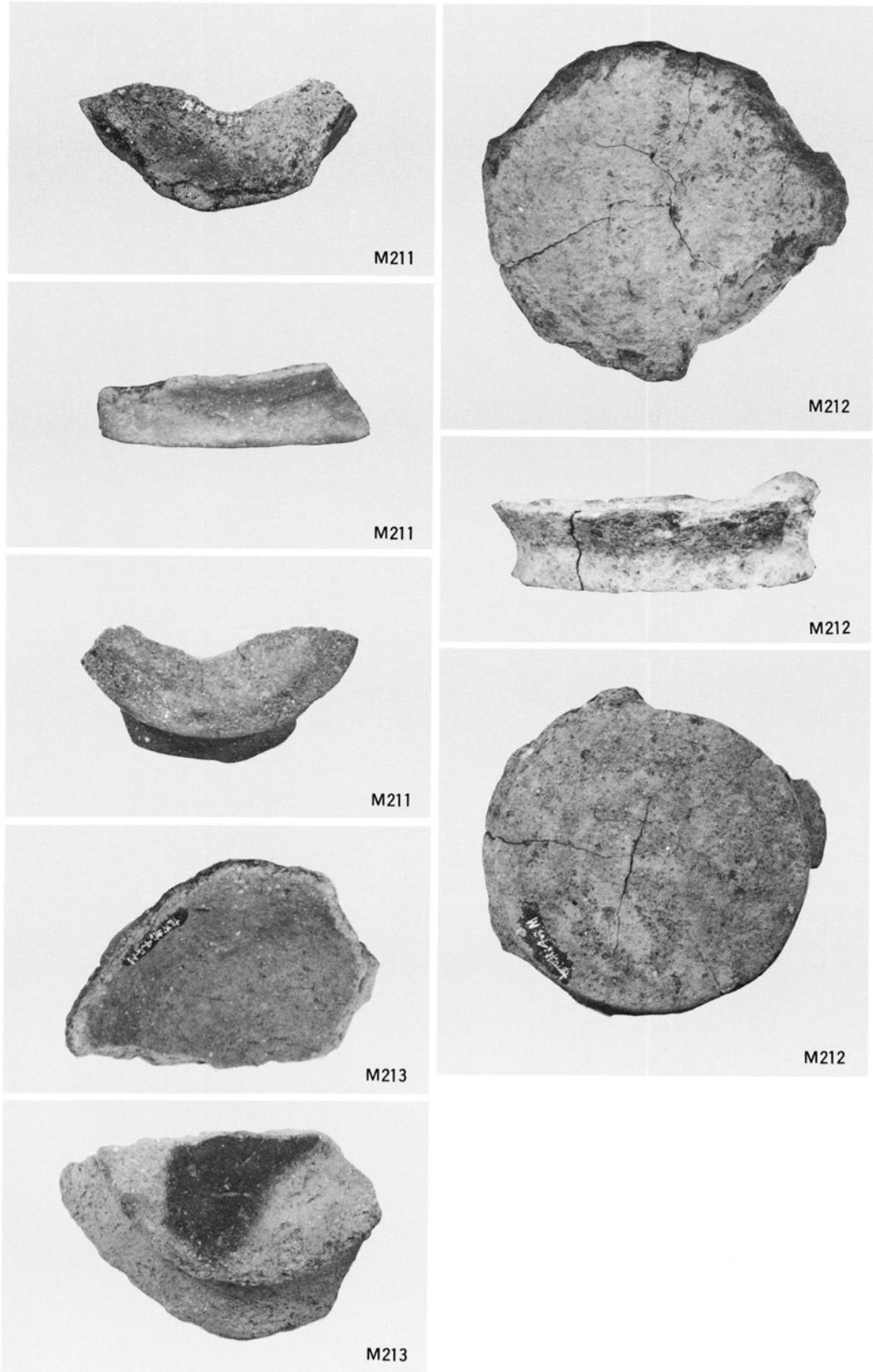
第1、2号溝出土遺物





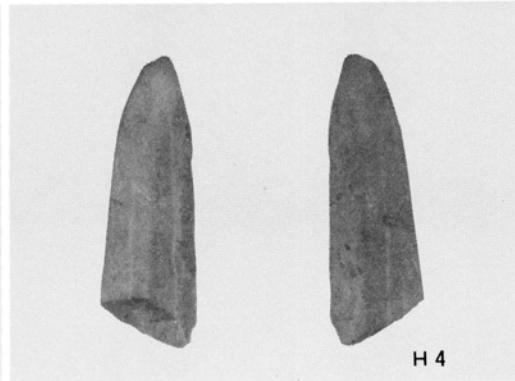
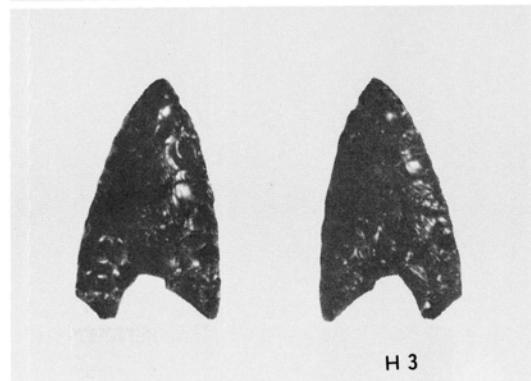
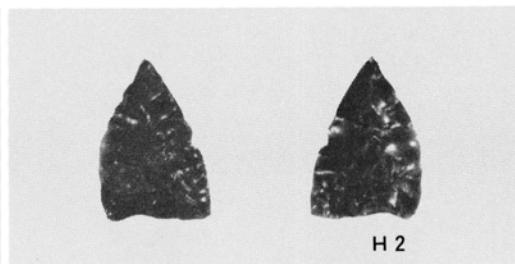
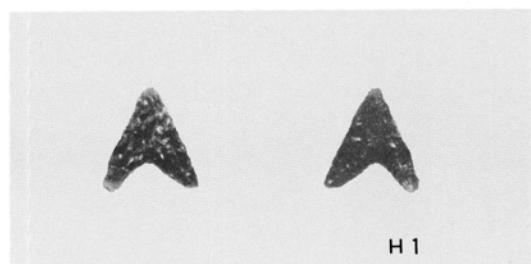
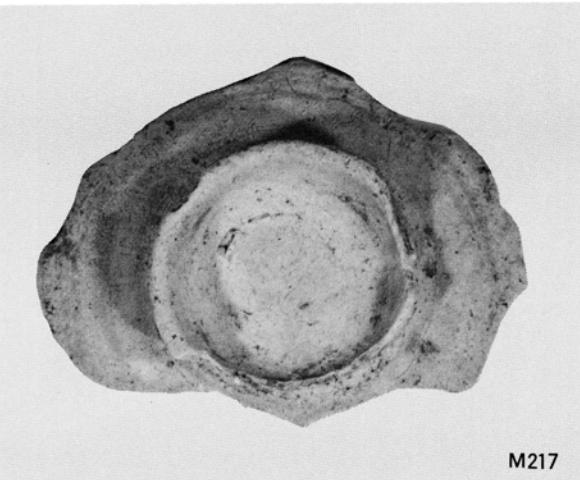
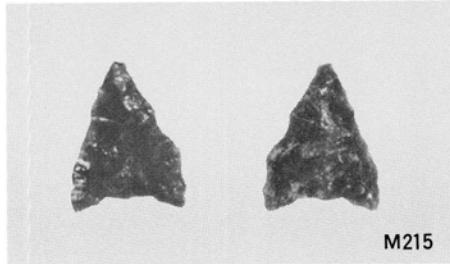
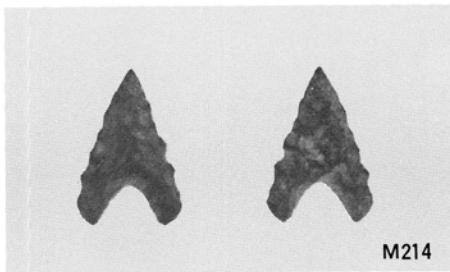
第2号溝出土遺物





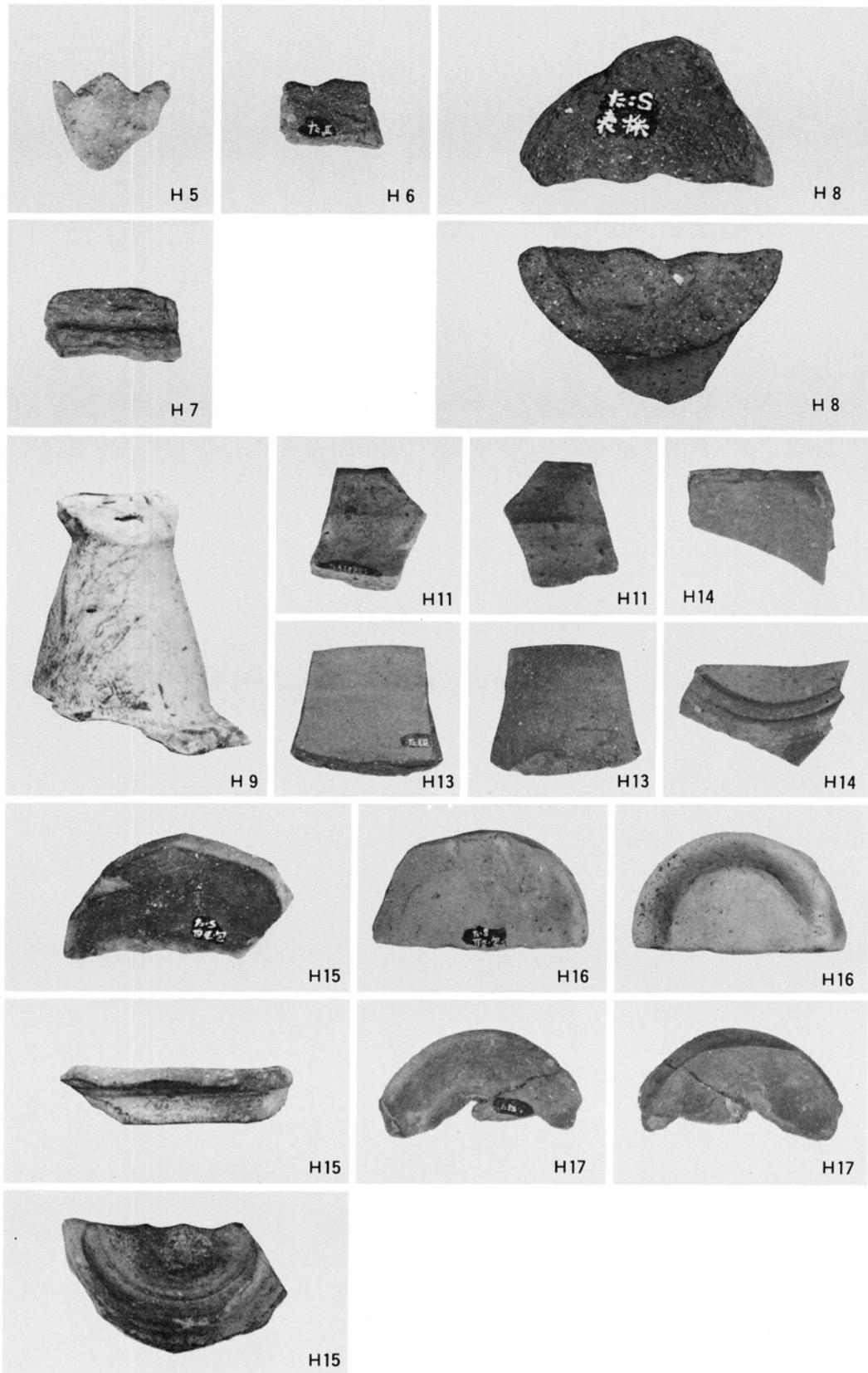
第2号溝出土遺物





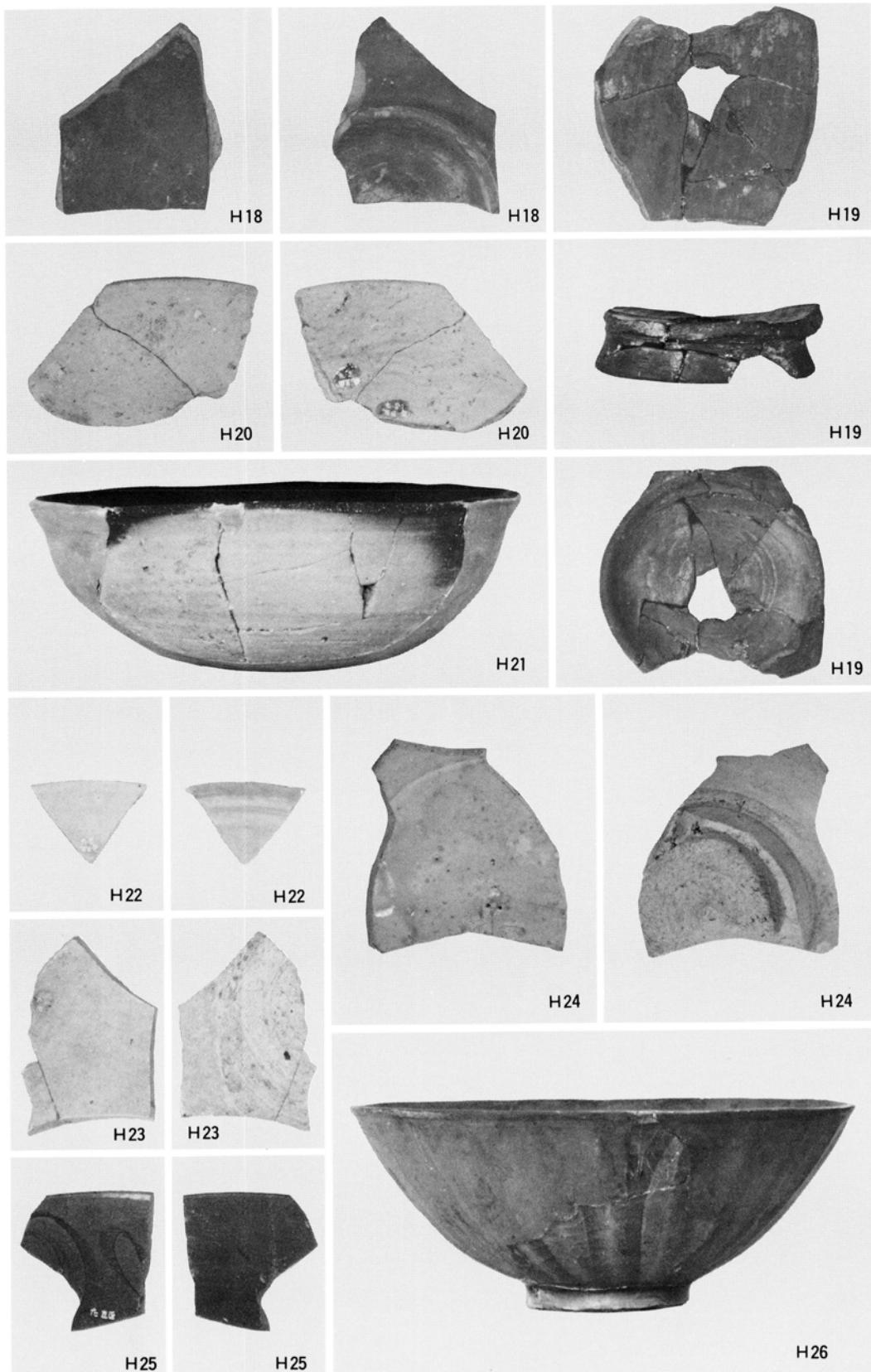
第2号溝出土遺物、表採、耕作土出土遺物





表採、耕作土出土遺物





表採、耕作土出土遺物



福岡市西区

# 高柳遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第70集

1981年 3月31日

発 行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1-8-1

印 刷 福博綜合印刷株式会社  
福岡市博多区堅粕3-16-36

高柳遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第70集

福岡市教育委員会